

---

# アイアンな俺の日常

アイアンさん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アイアンな俺の日常

### 【Nコード】

N9550V

### 【作者名】

アイアンさん

### 【あらすじ】

現在IS開始編 トニー・スタークとして転生した俺。とりあえず死亡フラグ敵対フラグをバツキバキと折り平和にいこうぜ！………は？IS？幻想郷？ちよつとまで！？平和な日常が遠のいていつちまう！！ 《この作品は「インフィニット・ストラトス」の中にアイアンマンや東方Projectを始めとした様々なものを作者の思うままにぶち込んだ作品です。カオス、最強系などが苦手の方はご注意ください。》

第一話 ひとり (笑) 誕生 (前書き)

プロローグみたいなもんです。

第一話 ㄋトニ一(笑) 誕生ㄋ

200X年 日本某所

「で？何泊？」

「六泊七日で」

とあるレンタルビデオ店にスーツを着た男と気怠そうな小柄の少女がいた。

「また七日か、仕事忙しいのかい？」

「まあ、そつすね。終わったと思ったたらまた新しい辞令来たし……  
…休暇が欲しかとですよ」

DVDを専用の袋に入れながら質問する少女に対して男は苦笑いで答える。

少女はつまらなさそうに「フン」と鼻を鳴らした。

「全く、お前も頑張りすぎだよ。この前なんてこ、こ、「高周波包丁」そうそうそんなの作ったりして世間を賑わせたくせに。」

「ハハハ、次は鍋だそうです」

「……………今度は重力を操作したりするわけじゃ無いだろうね？『重力鍋』ってな感じで」

「あ、アイデアいただきました」

「……………し、しまった！また変態製品の誕生を促してしまった！」

「変態とは心外ですね。高性能ですよ」

「性能高すぎて手綱が握れんわ！！」

少女は身を乗り出して男に食いついたが男はどこ吹く風のようにであった。

少女はため息をつき、今回男が借りたDVDの一覧に目を通した。

「劇場版特攻野郎Aチームにブラックレイン、フォレスト・ガンプ。そしてアイアンマン2か……………アイアンマンは昔から好きだったね？」

「まあ映画館に十回ぐらい見に行くぐらいは……………」

「行きすぎだわ！ったく、そのうちアイアンマンのスーツ作るんじゃないのかい？アンタならやりかねんよ」

「訴えられますよ、マーヴルに」

「そっちの問題！？」

「まあ作れないのが事実なんすけどね……トニー・スタークはマジで天才だわ。あんなの現実にといたら世界がやばいっすよ」

少女は内心「お前が言えたことか」と毒づきながら男にDVDの入った袋を差し出した。

「結局、特許取ったんだろ？お祝いに今回はタダにしといてやるよ」

「ああどうも、まあ特許取ったのは別のヤツですけど」

「チキンめ、書類上はだろ？」

「平和主義と言って貰いたいです。孫に看取られて死にたいんですよ、俺は」

「……………そんな自分が報われなくなるような生き方して、疲れないのかい？」

袋を受け取った男はフツと微笑み入り口まで歩いて行き、振り返らずに立ち止まった。

「決めたんですよ、それで構わないって」

そうして男は出て行った。店の中は少女一人になった。少女はタバコに火を点け煙を吐きながら天井を仰いだ。

「……………大馬鹿者め、お前は」

その呟きを聞き入れる者は既にいなかった……………

「あ、すみません！領収書下さい。」

「台無しだよ！！」

なんとも締まらない雰囲気である。

「返せ！シリアスな空気を返せ！！」と理不尽な理由で頭にたんこぶを作り、ジンジンと痛むそれをさすりながら己のアパートに向かう男。

新たな辞令をどう処理するか考えながら階段を登っていた。本人の技量で簡単に済ませられる用事なのでさっさと終わらせて借りたDVDを見たりパソコンで遊びまくるつもりだった。

自分の部屋に着く。相変わらず混雑しており床には様々な物が散らかっていた。本人は気にせず指を鳴らして大画面のパソコンを起動させる。階段で既に考えた辞令のプレゼンを淡々と組み上げて行く。一時間程で出来上がり、軽く背伸びして眉間を揉んだ。

「重力鍋はこれでよしと……………」

次に新しいウィンドウを開く。ここからは彼の趣味でネットサーフ

インの開始である。基本的に某笑い動画が主体だ。今回はお気に入りイラストレーターの生放送を見た。

「俺も生放送してみようかな……………」『重力鍋つくるよ!』とか」

世紀の大発明をそんな所でして欲しく無いのだが。

「ん?」

そんな感じでぼうつと画面を見てみると右下のバーからメールが届いたという通知が来た。

ウィルスを一通りチェックした後開いてみるとそのメールは不気味なものであった。送信者のアドレスが文字化けしており本文は無し、サブタイトルは「扉」と書かれてあった。添え付けで画像が付いているが情報では800×800のサイズで容量が8ギガバイトになっている。

(商売敵のイタズラか?)

少しゲンナリしながら画像のデータを慎重に解析し、開いても問題無いと判断したので画像をウィンドウに出した。

開いてみればなんの変哲もない黒い円だった。くつきりとした黒い円、なぜこんなにも容量があるのか不可解だった。

ちょうど電話が鳴る。このカルト染みたメールが気になったがとりあえず彼は出ることにした。

「はい、もしもし」

《ああ、ちょっと聞きたいことがあるんだが……………》

先程のビデオ店主である少女の声だった。

「さっきぶりっすね？どうしたんすか？」

《いや、貸し出したDVDの中に中身が違っちゃつが紛れているようなんだ。確認してくれるかな？》

「ったく、だからTSU AYAみたいに剥き出しにすればと言ったのに……………」

《カバーが無い単行本コミックは嫌だろう？私にとってはそんなものだよ》

「へーへー大層なジンクスですね〜」

たまたま電話機の横に置いてあった袋の中を確認する。「フォレスト・ガンブ」と書かれたDVDのパッケージを開くと中には真っ黒なディスクが入っていた。彼の顔が大いに引き攣った。

「……………あの崎守サン？この恐ろしいディスクはなんでござい？まさか呪いのDVD等では……………」

《ああ、心配ない。……………それは『鍵』だからな》

「鍵？」と聞き返した瞬間、部屋の電気が落ちた。

- 『鍵』の存在を確認しました。『扉』の術式を発動します。-

無機質な女性の声が響く。彼本人は完全に硬直していた。

ギギギと声のする方へ首だけ動かして見るとパソコンの画面の中の黒丸の中心に目が浮き出ていた。さながら「このロリコンどもめ！」といった具合の迫力である。

- 情報の獲得を開始します。情報媒体を吸収……………紙媒体、完了……………円盤の解析に失敗。道具「パーソナルコンピュータ」を使用し再解析……………成功。-

画面から黒い触手のような物が飛び出し自分の部屋のDVD、漫画、書籍等様々なものを画面に吸い込んでいく。

「な、なんじゃこりゃああああ!? 崎守さん! 俺のパソコンが大変なことになってるんですけど!?!」

《落ち着け、扉が情報を吸収しているだけだ。別に取って食おうってワケじゃ無いよ》

「さつきから扉扉ってコレ完全にハガレンの「真理の扉」じゃあねーか!! 俺は人体錬成してねーぞ!?!」

《別に右腕片足だけ持って行かれるんじゃない……………全部だ》

「てんめえええええ!! 絶対電話越しにドヤ顔してるだろ!?! 全部なんて余計タチ悪いわ!! この淫キユベータ!!」

《わけがわからないよ》

- 範囲内の情報の獲得が完了しました。転移先の検索を開始……………術式の記入者の設定により鍵の所有者に最適な点へ絞り込みを開始……………一件該当、転移先を決定しました。-

- 準備完了、転移開始。 -

《また逢おう、》

「へ？」

名前を呼ばれた直後、束になった触手が彼を一気に搔つ攫った。彼は抵抗する間も無く、パソコンの画面へと飲み込まれパソコンも吸い込まれるように消えた。

部屋にはもう何も無く。電話の受話器のみがコトリと落ちた。

《案ずるな、次の世界は君を受け入れるよ。必ずね……………》

Side .

暗い。海でも無く、宇宙でも無く、ただの闇。その中を漂い続ける。

「もうワケわかんねーよ」



- 情報の挿入が終了しました。 -

や、やっと終わった。気絶できないから軽く地獄だったわ……………

- 間もなく座標に到着。扉の術式を終了します。 -

もう突っ込む気も無い。とりあえずどこかに向かっているのは分かる。暗闇に光が射した。

光が大きくなってくる。同時に引き上げられる感じがした。

そして光が視界一杯に広がり……………

……………ヒゲがいた

「あぶ( )は?( )」

「見ろ、男の子だ!!」

「ぶ、ば( )へ?アレ?( )」

誰だこのヒゲのおっさん?どっかで見たよつな……………

てかあれ?体が凄く重い。満足に動かん、うおお!動けえ!!

「もうこんなに体を動かしているぞ！？なんて元気な子なんだ！！」  
は？子？俺25だぞ？

そんな俺の視界に自分の手を運ぶ。  
それは紛れも無く俺の手であり、赤子の手だった。

ま、まさか……………幼児スタート？

ジワジワと来る絶望感を感じているとヒゲのおっさんに持ち上げられた。

「お前はトニー……………トニー・スタークだ！！」

ポク、ポク、ポク、チーン

思い出した。このヒゲのおっさん、「アイアンマン」の主人公トニー・スタークの親父さんだ。

そして今俺にトニーと名付けた。即ち、俺が主人公のトニー・スターク。I am アイアンマンってワケだ。

……………あ、あはははは。なんていうかもう、ねえ？もうあれだよ、あれ。

「あぎやあああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！  
（わけがわからねえええええ！！）」

アメリカのとある病院、一人の子供が誕生した。

彼のおしめを担当した看護婦片腕を押さえながらは語る。「まさか赤子が十字固めするとは思わなかった」と……………

彼の友人達は悟った目で語る。「馬鹿と天才は紙一重と云われるがあいつは馬鹿と天才が一心同体だ」と……………

彼の秘書は無表情で語る。「変態」と……………

そして彼の父は笑いながら語った。「息子は私の最高傑作どころかこの世の最高傑作だ」と……………

これは一つの物語、トニー・スタークの人生である。

彼はどのような喜劇を見せてくれるのか。

舞台のカーテンが上がる。

さあ、はじまりはじまり。

第二話 くスターク・エキスポin ジャパン 準備編く (前書き)

カオス過ぎます、設定も改変の極みです。あとご都合主義。

「構わんよ、見せたまえ」という方はどうぞ。

第二話 ｽﾀｰｸ・エキスポ in ｼﾞｬﾊﾟﾝ 準備編

トニー・ｽﾀｰｸ

技術者達の中で彼を知る者はちらほら。表向きでは「ｽﾀｰｸ・インダストリーズ」社長、ハワード・ｽﾀｰｸの一人息子として知られている。

一見ただの御曹司だが実は優秀な技術者の一面を持っている。この事はあまり知られていない。理由の一つとして父ハワードがその能力の悪用を防ぐため、が挙げられる。しかし、本当の理由はそのような些細なことでは無かった。

彼は形容するならば………色々ブツ飛んでいたのだ。

まずは生後五ヶ月、排泄物を出さないために入院。とうとう出したかと思つて担当の看護婦がおしめを替えようとした………が、本人が激しい抵抗をする。業を煮やした看護婦は少し強めに押さえておしめを替えようとした瞬間、その力を利用してトニー（ごかげつ）は十字固めに移行。神業を發揮した。

看護婦の悲鳴を聞いた研修医達によって何とか収まったがどうしたものかと夜は更けていった。

翌朝、突然消えたことを確認。警察や軍関係者数名が搜索に出たが、  
当の本人は職員トイレのウォシュレットを堪能していた。

生後二歳、父が与えたレゴブロックで遊ぶ。わずか一時間で父のモ  
ザイク画を作成。お守りをしていた職員をも絶句した。父は感動し  
息子を抱擁、またもや十字固めが発動した。

モザイク画は今だに社長室に飾られている。

小学校下級生時代、父の部屋にあった株取引の本にはまる。重役の  
一人であるオバディア・ステインといつの間にか意気投合。儲け話  
をするようになった。

ステイン自身も初めは子供をあしらう程度だったがトニーの指摘に  
驚愕、そして問答を繰り返していった。

どこから覚えたのかお互いに「お代官」「越後屋」とニヤニヤしな  
がら会社の休憩室で話す光景はもはや日常茶飯事である。

小学校上級生時代、ロシアにて様々な死闘を繰り広げる。

実際はただのモナコのカーレース観戦だったがトニーが車を間違え  
なぜが雪山に放り出される。自作の探知器片手にカーレース会場に  
向かおうとしたものの、狼、大猪、アナコンダ、熊、巨大白熊とだ  
んだんグレードアップしていく野性の生き物に木の枝一本で対応。

町の外れの家で道を聞かせて貰おうとしたが何の因果かハワードに怨みを持つヴァンコ博士の家だったためまたもや戦闘。電撃鞭に対して木の枝二本で勝利した。

そのままトニーはヴァンコ親子をスカウトし一緒に車でモナコの会場へ。父を説得し今回の事件は解決(?)した。

博士の息子イワンはトニーの暴走ストッパー役となった。

中学生時代、夏休みの自由研究にてペットボトルロケットの限界を追求。友人のローディ、イワンを巻き込み父も参加。会社の技術者まで加わっていきいつの間にか「トニーたちの夏休みの研究を大いに盛り上げる計画」とどこぞの団長が結成した部活みたいな計画になり、会社では一大プロジェクトへと進化した。

夏休みギリギリまでかかり作り上げた結果、一時間活動可能、最高速度200km/h、機関銃(ゴム弾)装備でオートパイロットによる自動制御といった魔改造レベルまで達した。

分厚い辞書みたいになったレポートと使用するのはあまりにも危険な実物の対応に教師は頭を抱えた。

そして現在、トニーは中学を卒業し高校生になる気も無くスターク・インダストリーズ本社のとある一室に入り浸っており、気の向くままに生活していた。

「……………ん」

目が覚めればソファの上だった。  
いかん、また寝落ちしてしまった。またイワンにどやされる。  
説教する友人の顔を浮かべながら体を起こす。

携帯電話の電池にアーク・リアクターを組み込もうと思って設計していたんだが……………終わった瞬間に寝たみたいだな。  
飯食ってさっさと作りに行くか。

シャツのシワを伸ばしながら時計を見た。

「って、うわ……………もう昼の1時かよ」

どうやら朝方までやっていたらしい。社内食堂に行くか、腹減ったし。

コンコン

「あい、どちらさん？」

『トニー君起きてる？ボクだけど』

この声は、アイツか。

サンダルを履き扉を開ける

「どした？タチコマ」

目の前には青いボディに「」の穴が空いた球体、四脚の足を持つ思考戦車「タチコマ」がいた。12歳の頃に所有する情報を基につくったやつだ。構造、AIも完全再現。育成方法もバトーさん方で天然オイル様だ。結果として……

「いや〜一時間置きに来たけどやつと起きたよ！最近はしょつちゅうボクに起こされているじゃないか。若人がそのようではいかんよ」

このように感性豊かになった。ちょっと不安だが。

「俺よりお前が若いだろ……用事はどうした、用事。」

「あつ、そうそうハワードさんが呼んでるよ？社長室に来てって」

親父か……電話で呼べばいいのに。

あ、そういや携帯分解しているんだった。

「昼メシ食ってから行くわ。タチコマも来るか？食堂のおばちゃん  
が天然オイル置いてくれたらしいぞ？」

「ホントに！？フッフ、全くしょうが無いな〜トニー君は。彼女がいないからってボクを食事に誘うなんて〜。ボクの魅惑のボディにメロメロなんだね！

まあその素敵なお誘いに乗ってあげようじゃないか。」

「そんなボディに欲情せんわ!!………つたく、行くぞ」

「照れてる〜照れてる〜」

そんなアホな言葉を聞き流しながら食堂へ向かった。

食堂。

カレーライスを食べながら隣のタチコマを見る。

自分がこの世界で生を受け早十五年、思い返せば色々頑張ったと思う。

死亡フラグを回避するためにハゲ、もといステインのオッサンに接触。話してみれば気さくなヤツだった。あと金の動かし方がすごいやブあい。ありや自分の能力生かし切れずにテロリストと接触して映画のようになったんだなとしみじみと思う。

欲のある人間は嫌いじゃないし別に悪いことじゃない。かのメダルライダーも似たようなことを言っていた。当たり前のことなんだ。かくいう俺もお金大好き利益大好きなのだ。

次にどうにか「とある科学の電気鞭」であるヴァンコさんと接触したいと思ってモナコのカーレースを見に行ったら雪山スタート。軽くポルナレフ状態になった。

猛獣がわんさかとお出るわ出るわ………ちょっと太めの木の枝で対応しましたよ。人間追い詰められたらイケるもんだと痛感した。木の

杖でするのはあれだったけど気絶させられる程度でいけた。

雪山を出て民家だヤツホオオオイ！！と思って上がらせて貰い自己紹介してたら家主のオッサンがブチ切れ。ヴァンコ博士と名乗った直後高圧電流が流れた鞭をぶっぱしてきやがった。

それなんてご都合主義いい！？と叫びながら牽制。鞭を持って来た木の棒でグルグル巻きにして何とか武器を押さえた。

そして殴り合いに移行。「親父のことはわからねえ！！けど俺は絶対に裏切らん！！だから手え貸しやがれえええ！！」と叫びながら上条さん張りの顔面ストリートで決着。大の字で倒れたヴァンコ博士は笑いながら「お前の負けだこんちくしょう」と言っただけで帰ることにした。

あとイワン、映画では車真っ二つにするアイツは俺と歳が近くてまだシヨタだった。

とまあこのようにアイアンマンの映画で敵対するヤツとかのフラグは一通りへし折った。ハマー？知らんなそんなやつ。

確か三部作って聞いていたがまだ2までしか見てない俺としては守りを盤石にしていきたいものだ。てかまだ親父死んでなくて現役バリバリだし。それにマーヴルのヒーローもいないので一安心した。時間もズレていて今2000年代に突入してるんだよね……俺がいる時点でおかしいか。

背格好も大分違ってしまった。体も鍛えているからか身長が伸びる伸びる。あと細マッチョ。体にリアクターも埋め込んでいない。

スーツは一通り作ってある。マーク6、つまりヴィブラニウムのリアクターを使ったヤツはまだ設計中だ。

まあそんなこんなで平和も目指して男、トニー・スタークは頑張ってますよってコトだ。

「ねえねえトニー君、カレー一口ちょうだい」

「アホう、今度カレー味のオイル作っというてやるよ」

場所は変わって社長室、目の前にはスターク・インダストリーズ社長ハワード・スタークが革の椅子に座っていた。俺は突っ立てる。

「日本へ行ってこい」

開口一番そういわれた。俺、ポカーン。親父、ドヤ顔。どういふことなの……………

「フフツ、これに目を通せ」

渡されたのはパンフレット、表紙には「Stark Expo in Japan」と書いてあった。

スターク・エキスポ。ウチの会社が主催で他の世界中の企業からも出展があるいわゆる「この世の技術の展覧会」といったやつだ。

「スターク・エキスポだが、今回から四年に一度ずつ違う国でやってみようと思う」

「オリンピックかよ」

「まあそう言うなトニー、それでその最初の開催地を日本にしてみようと思ったわけだ。」

最近日本の発展は面白いものでな？バブル崩壊後の国とは思えない成長率だ。」

「まあそれは否定出来ないよな……………んで？俺に日本でどうしろと？」

「エキスポの責任者になって来い」

……………は？いや、親父殿？そんな「決まった」って顔されても。

え？責任者？俺が？

「……………嘘オ！？何で俺が！？」

「いや、お前が適任だと思ってな？だから行ってこい」

「十五のガキに何させる気だア！？ムリムリムリ！！ストレスで胃に大穴空くわ！！」

「胃に穴が空くような常識的な人間じゃないだろ？お前は」  
ヒドッ！！確かにそうだけど！

「いや、お父さん？ボク日本語は難しいかなって」

「嘘つけ、通販で毎週ジャンプ呼んでるだろ普通に。日本語の」

バ、バレテラ！

なぜだ！？いろんな通販経由してカモフラージュしていたのに！

「ステインが毎週持つて来てくれてな？」

あのバカに渡したのが間違이었다……ナンテコッタイ。

「いや、俺友達の約束が……」

「ローディ君は学校の寮、イワン君はヴァンコ博士の手伝い。……  
…お前他に友達いないだろ？」

「ひ、暇じゃ無いんだい！」

「リアクターの研究も大体終わって最近ゲームボーイに夢中だそうじゃないか？ステインが言ってたぞ。大丈夫だ、ニンテンドーの新作もそこにある。」

またステインか！  
アイツ腹黒さはそのまんまだ！！

「まあシキオリオリ（四季折々）と呼ばれるくらい景色も美しく、

文化の趣も深い。マイナス要素は無いだろっ？」

「へえ〜行ってみたいな〜」

馬鹿！ステルス迷彩の意味が無いからしゃべんな！！

「ああタチコマ。君も行つて良いぞ」

「ちよつ親父！？」

ステルス迷彩を切つてタチコマが現れる。

「ホントに！？じゃあ行く行く！」

「おいタチコマ！お前勝手に……………」

「ではタチコマ、トニーを連れて早急に準備に取り掛かってくれ。無理矢理で構わん、日本を楽しんできてくれ。これは社長命令だ」

「了解！」

タチコマのアームに頭をガシツと掴まれてズルズルと引きずられる。つて！！

「痛い痛い！！ケツが削れる！！あと頭が何かミシミシ鳴ってる！！」

「も〜男の子なんだからわがまま言わないでよ。早く行くよ〜」

ちよ！？このままで足をローラーにすんな！！

「いざ日本へ、レッツゴー!!」

「いやああああ!!シナタクナーイ!!」

数日後、自家用ジェット内

「……………はあ」

「むむ！トニー君！ため息をつくとき幸せが逃げていくらしいよ！」

「もう『実家に帰ります』って置き手紙して夜逃げしてる気がするんだが……………」

「まゝたまたそんなこと言っちゃって！ホントは楽しみなクセに！あ、お姉さんオイルちょうだい！キンキンに冷やしたやつね！」

「……………まあ、楽しみではあるんだがな」

「ん？何が？」

「……………スモウハラキリスニンジャ」

「おお！素晴らしいジャパニーズカルチャー！！」

……………ある意味帰郷だしな？

そう思いながらボンヤリと窓の外を眺めた。

**第三話 ｽﾀｰｸ・ｴｷｽﾎﾟ in ｼﾞｬﾊﾟﾝ 開催編 (前書き)**

次回辺りに東方、ISのキャラが出ます。

あと駄文注意。

引き返すなら今の内。

第三話 　↳スターク・エキスポ　in　ジャパン　開催編↳

タチコマに拉致られ日本へ飛んで早くも一年が過ぎた。

時間がかかり過ぎてるって？そうだろうそうだろう。

.....あのクソ親父殆ど何も準備してやがらなかった!!

日本支社へ行って確認したんだが日本政府から開催の許可を貰ってるだけだった。あとは何も無し、人員、予算、開催地、参加企業その他諸々。全く準備が無かった、全くだYO!!

さすがに俺も茫然自失。タチコマが自分の頭を叩くまで真っ白に燃え尽きた状態だった。

日本行きの通達をされた時に渡されたパンフレットも中身を見れば真っ白だった。

親父に連絡したら全部自分でしろとのこと。ふざけんな!こんなとこいられっか!!俺はもう帰る!!と、死亡フラグ臭い台詞を吐いたら親父は一言。

「逃げるのか?情けない。やはりその程度か」

ブチッ!!

………オーケー、久々に切れちゃったぜ。やってやるっじゃねえかー！

と、今となって考えてみれば余りにも安い挑発に俺はホイホイと乗ってしまったのだ。

ダイジエストで思い出して見よう。

プロジェクトX風 (BGM 地上の星)

予算準備。

「そんなワケでいくらかかるのかな？教えてステイン先生！」

「まあ軽く見積もって………このぐらいだな」

「ウエ！？」

「あと会社からあまり出せないぞ？」

「ウソダンドコードーン！オンドウルラギッタンディスカー！」

「………まあ、まずはスポンサー探したな」

「………ハイ」

人員集め。

「本社の人間ばかり集めるんじゃないや無くて日雇いのバイトを募集するか？でもあまり集めると人件費の調整が難しいな……………あとスタッフの昼食、交通費手当も出てくるし……………」

「トニー君、バイトの人を削ってボクと似たようなの量産すれば？装甲はアルミで」

「それだ！さすがタチコマ、今夜は高級オイルだ！！」

「やったあ！！」

ウチコマ（安価）量産決定。

集まり過ぎた参加企業。

「ナニコレ！？会社紹介のパンフレットでビル群が出来上がってんぞ！？」

「え、えつと〜」

「え？鈴木さん（日本支社秘書課の人）どうかしましたか？」

「まだ、あるんですよね……………」

「……………ナニガDeath？」

「その、これらと同じ量の……………」

「」

「あれ？トニー君？」

「ブクブクブクブク」（白目剥いて気絶）

「ト、トニーくうううん！！！！」

場所の確保。

「んでどうするよ、ローディ？」

「何で俺を呼ぶ!? イワンがいるだろ!? それにまだ学校があるんだぞ!」

「アイツは別件、それとお前を呼んだのはのうのうと学園ライフを送っているお前に俺の苦勞を押し付けるため」

「Oh, shhit! そんなしょうも無いことかよ!」

「ま、まあまあ。それでどうしますか? なるべく広い場所を取らないと……」

「あ、スミマセンちょっと興奮してしまって。………そうですね、鈴木さんでしたか? 想定した会場の広さはどのくらいですか?」

トニーと和製ジャンプを読み回していたため日本語ができる

「あ、ハイ。えっと………最低これくらいですね」

「………かなり広いな」

「まあ企業が沢山集まるからな。今も増えてるぞ?」

「見合った場所はあるのか?」

「うんにゃ、全く無い。広さは足りてるところはあるんだけどなあ

………ト田舎なんだよ」

「なるべく新幹線、またはモノレールが通っている所に近付けたいんです」

「そうですね………軽く土地が出てきたら良いんだが」

「………それだ。おいタチコマ! 俺が指定する範囲にある全く整備されていない島、あるか?」

「ちよつと待ってね………おお、ビンゴ! 一件あったよ!」

「トニー、どうする気だ?」

「なぐに、無ければ造れば良いんだよ。

鈴木さん! 政府の担当者に連絡お願いします!」

「はい!」

「タチコマ! 直接見に行ってデータ採りに行くぞ! お前に直接乗り込む。鈴木さんとの通信はオープンにしとけ!」



……………そして無事に会場が完成、今日が開催日だ。  
俺は近くのビルの屋上から会場を見下げていた。

ホントに密度の高い一年間だった。  
書類の摩天楼を処理したかと思えばまた追加。徹夜なんて当たり前。  
五日間も寝ない時もあった。書類整理も夕チコマが手伝ってくれた  
なあ……………シユールだったけど。

鈴木さんやローディ、裏方で頑張ってたイワン、会社のみんなや工  
事の人達まで俺について来てくれた。

みんなで俺の誕生日をサプライズで祝ってくれた時はホロリときた。  
その日食べたピザは美味かった。

企業も無事に集まった。見渡すと熱気が高い。これなら退屈しなく  
て済みそうだ。

テレビ局もきてるな……………やべ、緊張してきた。

- ジャツ！ジャツ！ジャツジャン -

おっと、「踊る大 查線」のテーマ。俺の携帯か。

「はい、こちら葛飾区亀有公園前は《馬鹿なこと言っていないで早く  
会場に来い。10分前だぞ》…んだよイワン、ノリ悪いな」

《もう各国のお偉方やメディア、世界中の企業の社長が並んでるん  
だ。ノリもあつたもんか。大体お前は……………》  
「わかった、今行くよ。だから説教は勘弁な！」

電話を切る。もう一度会場を一瞥した。

「……………さて、気合い入れっか。」

最高のショーにしてやるよ。

エキスポ本会場。日本人だけでは無く外国からの来訪者も多数来ており、そこは様々な人種がひしめき合っていた。

人々が注目する中、壇上に一人の青年が上がっていた。しっかりと着た黒のスーツ、オールバックにした髪、そして年齢十五とは思えない風格。スターク家の御曹司であり本エキスポの最高責任者、トニー・スタークである。

そしてマイクスタンドの前に立ち、静に目を閉じた。

何も語らず、ただ立ち続けている。

会場全体が静まりかえった。

トニーは語り始める。

「皆さん、今回はここへ御来場いただきありがとうございます。」

流暢な日本語、彼の声が響き渡る。

「このエキスポの計画は一年前より発足しました。

父、ハワード・スタークは世界の技術が発展することを予見しこのエキスポを構想。そして私を中心にプロジェクトが始まりました。恥ずかしながら私のような十五の若造には荷が重いのと思っていました……当初は中々上手く行かなかったものです。友人、社の人間の支えあつて此処まで来れたと思います。」

誰も何も語らず、トニーの言葉に耳を傾ける。

「さて、山を削り、島を作つてまでこの会場を作つた訳ですが……世界の技術の発展、またその技術による生活の保障の確約。それらの礎としてこのエキスポの跡を残したいと思つたのです。」

そしてトニーはニヤリと笑った。

「さて！しんみりした話はここまでだ！」

トニーが右手を振り上げると後ろのスクリーンに大量の企業のロゴ

マークだ映る。

「参加企業は約1000社!!どれも最高の技術ばかり!」

右手の人差し指をクルリと回すと空で待機していた戦闘機が五色の煙を出しながら飛んでいく。

「どれも飽きさせない、最っ高のエンターテイメントだ!!」

拳を強く握りしめ、トニーは大きく息を吸った。

「これより、スターク・エキスポインジャパンを開催する!!!!!!  
Everybody……Welcome!!」

ワアアアアアアアア……!!!!!!

一気に大歓声が響いた。

第四話 くスターク・エキスポ in ジャパン 散歩編（前書き）

キャラの性格と話し方おかしし

ご都合主義だし

文法メチャクチャだし

もうヤヴァい、色々と。

それでもよいのですっていう菩薩の如く寛容な方はどうぞ。

第四話 　↳スターク・エキスポ in ジャパン 　散歩編↳

……………開催宣言をして三時間後。

「っ、疲れた……………」

今俺は用意された自分の控室でソファーに寝転がっていた。

ウエルカムと叫んでかつこよく(?)ステージから降りてすぐにパーティー会場へ連れて行かれた。

まずは記者会見。弾丸の如く飛んでくる質問に全部答える。

次に会場にいるスポンサーや大企業のお偉いさんに挨拶回り。百人ぐらい超えた時には既に脊髄反射で答えていた。

本来こういうパーティーは夜に行うものだが、俺がまだ未成年であることを考慮して昼に行うことにしたそうだ。本当にありがたい。

頭に「おい!!お茶!!」と書かれた冷えた缶が乗せられる。

「冷たっ!」

「お疲れさん、中々良い演説だったぞ?」

俺の頭にヒヤド(弱)の攻撃をしてきたのは、灰色のセミロングの青年、イワン・ヴァンコだ。

普段は父であるヴァンコ博士の助手をやっているが、技術者としての腕も確かだ。しかも歳は一コ上。

「接待地獄から帰って来た男になんて仕打ちだ。てか何処行つてた？」

「例のヤツの調整、終わったから報告に来た。離れてても聞こえたぜ？お前のウエルカム」

「うわ、ニヤニヤうぜえ！！ってかもう終わったか、早いな」

「タチコマが暇だ〜って言いながら手伝ってくれたよ」

「ああ、アイツすること無いからなあ、表にあんまり出せないし……例のヤツ、もう動かしてあるのか？」

「もう仕事させてる」

そっかあ〜、と言いながら少し厚めのパンフレットをパラパラとめくり内容を見てみる。

今回のエキスポは急ピッチで開拓した島を使っている。日本政府も最初は渋っていたが、使用した後の設備、会場、人工島は国に無償で譲渡することを伝えたら了解してくれた。

開催期間は一年間。年中無休であるが、ある理由で従業員はそんなにいない。

展示はスターク・インダストリーのコーナーを中心に広がっており。扇状に企業のカテゴリー分けがされている。

参加企業も大小様々。参加希望者は俺が全て面接し、熱意があれば自営業の所も採用した。なので軽くお祭り状態だ。

やばい、超行きたくなってきた。でもイワンうるさいしな……

「別に行ってもいいぞ？一年間遊べなかつただろ」

「何故ばれたし」

「お前のことだからな………わかり易いんだよ。」

まあ企業の見回りつて名目で行つてこい。服装も変えるよ？」

「お母さんかおまえは！まあ、サンキューな」

では早速行こう、俺は髪を下ろして伊達メガネを掛ける。服はダメージ入りの青のジーンズに白のTシャツ、上に黒で赤ライン入りのパーカーを羽織る。

お忍びモードの完成だ。

「んじゃ、行ってくる」

「楽しんでこい」

さあ、何処から行こう？

まず最初に来たのは飲食ブース。ここは加工食品から本場のレストランまで様々なジャンルの食品が採り揃えてある。昼のパーティは挨拶ばかりで何も食べて無かったのでここで済ませることにした。パスタうめえ。

「ゆ、幽々子様！食べ過ぎです！」

「妖夢く貴女も食べたいの？はいどうぞ」

「違います！そういうことでhモガモガ」

「ほくらもつともつと」

「……………！……………！」パンパン！（タップしている）

……………うわあ、あそこの人達すげえ食ってんな。胸焼けしそう。

飯食ったし次行くか。

生活ブースに来た。ここは日常生活で使う物、例えばテレビ、洗濯機、携帯電話といったやつだ。

そろそろ家が欲しいから家電に目を通しとくか……………自分で作るか？いや、餅は餅屋だな。

「せんせー！東風屋さんがいません！」

「なんだと！？おーい、誰か知ってるか！？」

「そういえば早苗ちゃんさっき『ロマンのにおいがする』って言いながら走っていったよね？」

「また早苗が暴走した……………」

あれは確か抽選で当たった小学校だったか？あと工事がうるさかったお詫びに地元の学校も招待したな。

しかし迷子か……………前世の修学旅行を思い出す。行く前に崎守さんにお土産代として大金掴まされたな。

結局自由行動中に会った迷子の女の子の親を探すためにアメリカへ飛んで親見つけて、お礼にデイズニーシー連れて行って貰ってそこのお土産買ったな。

家具も見終わつたし次行こう、次。

軍事産業ブースか。あるところまでは一般公開されているが場所によつては規制されている所もある。未成年とかな？まあ俺は身分証明書があるからいいけど。

そういえばここに「機アレ（・・・）」が配備されてたな。見に行くか。

「こんにちは、トニー様。」

「あゝ今はお忍びなんだ。他の連中にも伝えといてくれ」

「了解しました、……………会場内ウチコマ各機へ通達しました。」

今目の前にある緑色の機体ウチコマ、搭乗部などが多少違うがタチコマと似た造形を持っている。会場スタッフの補充要員として製造した。

イワンにはコイツの製造、及び調整を任せていたが問題無いようでした。安心した。

まあ急ピッチだったため装甲はアルミ、AIは仕事をこなすだけでまだ育っていない。天然オイル飲ませるか？

兵器も大体見たがあんまり面白いのは無かつたな。次行くか。あ、でもハマーってやつは殺人ペンは中々興味深かつた。

一通り見たな……ここが最後のブースか。  
文化ブース。ここは様々な国の名物や歴史、骨董品に関する物が多  
い。

他に比べて客足が少ないが何気に俺はここが楽しみだった。古きよ  
き知識には現代にも応用が効くしな？

展示してある巻物、書物、芸術品などを見ていたらある一つの企業  
の名前が目にとまった。

ボーダー商事。確か会社理念が「忘れ去られる幻想をお客様に」っ  
ていう不思議な所だったな。パンフレットに書いてある参加企業の  
一番下に名前が載ってた。空きの参加枠をくじ引きて勝ち取ったっ  
け？

幻想、ねえ。ちょっと見に行くか……

ボーダー商事の展示用個室に入ると畳が敷き詰められて真ん中に囲  
炉裏があった。壁側にあるテーブルには和紙で纏めてある書物が置  
いてある。

囲炉裏の近くに正座で座っているスーツを着た金髪の女性がいた。  
こちらに気づくとニッコリと笑った。美人なのでちょっとドキッと  
した。

「何か御用でしょうか？トニー・スターク様」

……ば、バレてる。

「ち、ちよつと息抜きがてら見て回ってたんです」

「そうですか……お疲れのようですね、お茶を出しましょう。こちらにお座り下さい」

拒否するのもアレなのでとりあえず靴を脱いで畳へ上がる。正座すると緑茶を出された。

熱すぎではなくちよつどいい温さの緑茶を飲みながら周りを見る。ガラスケースに刀、積み重なった書物、壁に掛けてある大量のお面。本当に何の会社だ？

「申し遅れました。私わたくしこつという者です」

スツと名刺を出された。「ボーダー商事代表取締役 八雲紫」と書いてある。

「やくも……むらさき？」

「ゆかりです」

「ああ、これは失礼。……で、この会社は一体？」

「基本はあまり物資が届きにくい場所に流通させたりすることを。後は文化資材の収集ですね」

なるほど。だからこんなに……

「文化資材とは、どのようなものを集めるんですか？」

「そうですね……………いわゆるマイナー、人々に忘れられがちなものでしょうか？」

「忘れられがち？」

「人は、忘れる生き物ですわ。何かを言葉で伝えていっても時間が経てば薄れていきます。ここにあるのはそういった流れに巻き込まれた物」

歴史の闇ってやつか。よくこんなに集められたな。そんなのは大抵消失するものだ。

「妖精と魔法、妖怪や陰陽師。そんなお伽話なことが実際過去にあったとしても……………いつかは幻想になってしまふのです。」

幻想、か。前の俺はもう幻想なのだろうか？

はトニー・スタークとなった。俺のこの元の名前、容姿同じものを持つやつはこの世界にいるのか？もしいなかったら　は完全な幻想となる……………それは。

「……………残酷ですわね」

「！……………フフフ、その通り。」

それはとても残酷なことですわ」

その後八雲さんに展示してある物とその歴史背景を説明して貰った、どれも教科書には載せられないことばかりだったが。冗談であってほしいと思っただが……………信憑性が異常に高かった。妙に八雲さんが

嬉しそうなのが気になった。

「今回はご教授ありがとうございました」

「まだ沢山ネタはありますのに……………」

「ハハハ…………あんまり長居するのモアレですし、そろそろ。」

「そうですか……………ではこれを」

和紙一枚と握りこぶし大の塊を渡される。

「もし興味がありましたらこちらへいらして下さい。場所はその地図の通りですわ。」

「この塊は？」

「それは幻想の一つ、名称は」

「ふう、面白かったわね。彼」

開催宣言の時、私は僅かな違和感を感じた。そして直接会ってそれが確かなものになった。

「幻想でありながら常識である存在、か」

幻想と常識。本来ならコインの表と裏であり決して交わらないもの。しかし彼は体現している。

「興味深い意見も聞けたわね」

幻想となっていくもの、彼はそれを「残酷」と答えた。

幽々子が「外の料理を沢山食べたい」って言うから参加したけど……  
……思わぬ収穫だったわね

「トニー・スターク、幻想郷は貴方をどう扱うのかしら？」

受け入れるか、拒絶するか。

それとも……

「ゆ、紫さまあ〜〜！」

「あら妖夢、どうしたのかしら？」

「お、お金が尽きました……………」

「……………五十万ぐらいあげた筈だけど」

「使い切ったんです！幽々子様のお食事代に！しかもまだ食べているんです……！」

……先ずは食いしん坊な友人のところへ行きましょうか。

トニー・スタークですが、今霧困気が最悪です。

八雲さんのところを出て長時間正座していた足が急に痺れた。なので足を休ませるために近くににあった庭園に来たんだが……ベンチはほとんど埋まっていた。リア充爆発しろ  
そして小学校高学年ぐらいの子が一人だけパソコンいじっていた。スペースもだいぶあったので座らせて貰おうと思いを掛けた。

「スマン、こつち座っていいか？」

「あなた誰？気安く話し掛けないでよ。謝るぐらいならどっか行ってくれないかな？」

俺、完全フリーズ。

「い、いや、その、ベンチの空きがここしか空いてなくてな？」

「立ってればいいと思うよ。だから消えてくれない？」

な、なんて毒舌！だが！

「足が痺れててちょっと座らせて欲しいな〜って」  
「這いつくばってれば？そしてあっち行って」

「コ、コノガキ……………」

「いいぜ、そっちがそのつもりなら俺にも考えがある！

「それでも座らせてもらうぜ！！」

「だから……………って！勝手に座らないでよ！邪魔！」

「あーあーキコエナイ」

ああ、やっと落ち着いた。帰ったら風呂入るか……………

アレ？急に大人しくなったな。どっかい

「あばばばばばばばばばば！！！！！！！！！！」

こ、高圧電流うう！？軽くスタンガンの五倍逝ってるぞ！？

「こ、殺す気かあああ！！！！」

「消える？それとももう一回受ける？」

コイツ可愛い顔して中身は真っ黒だな！つゝか

「親に何てモン持たされてんだ……………レギュレータいじくってんだ  
る絶対」

「え、わかるの？」

「それと衣服の上から流しやすいように接触端子ギザギザにしてん  
な？……………電気なんざヴァンコのお腹一杯だ」

「……………」

「あーまだビリビリする。わあったよ、そこまで嫌ならあそこのりア充の横行ってくる」

「……………あなたのその浅い知恵に免じて、隣、座ってもいいよ」

「……………まぢっ？」

「座らないの？」

「……………座る」

隣に座る。

しかし、沈黙が続いた。

……………い、息苦しい!!

いや、こんな空気になるとは思ってたよ？もう足の痺れより精神が麻痺してきたわ!!

ふと横を見る。そういえばコイツ一人だな？

「おい、お前親どうした？」

「さあ？このつまらない出し物を見て回ってるんじゃない？」

ぐっ！エキスポのことと言われるとは思ってたけど、結構グサツとくるな。

「つまらないって……………結構面白いだろ？何てったって世界中の技

術が集まってるんだぜ？」

「あなたの感覚なんて知ったことじゃないよ。どれも五年前からの技術に毛が生えただけ、何も新しくない」

言われてみればそうだな、真新しさは感じなかったのがざらだった。

「でもよ、眼鏡に適ったやつぐらい少しはあるだろ？」

「全然。どれもアンティークものばかり、一つだけ中途半端なのがあったけど」

「へえ、その中途半端なのって何だ？」

「あれ」

少女が指した先にはウチコマがゴミの清掃活動をしていた。てかあいつ、ゴミを搭乗部に入れてんぞ……少しボディへこんでるし。

「AIの学習は中途半端、装甲もアルミで中途半端、動きもカクカクで中途半端。中途半端だらけだよ」

「スタークの新作だな。知ってるか？スターク」

「興味ないしどうでもいいよ。結局はこのお祭りもこの程度だったってことだね」

そう言ってまたキーボードを打ちはじめた。

中途半端だらけ、ねえ。まあ急ぎで作ったからな……

というかこの子パソコンで何やってんの？

「さっきからインターネットか？ゆとり世代め」

「あなたの頭じゃ理解できないことだよ」

「あん？こちとら機械村だぜ！」

「はいどうぞ、十秒以内で答えてね」

バツと画面を見せられた

……………驚いたな、コイツは。

「……………パワード・スーツか。しかも従来のヤツと全く違う。ジェット機の本バリングとは違う浮遊制御、これなら宇宙活動も楽だな。ドラゴンールみたいな動けるんじゃない？

それにこのバリアー、二重層ってことは操縦者の生命保持もかなり高くなる。そしてアーマーも部分的でおk。

センサーは……………操縦者の知覚強化といったところか。

この量子化はすげえな、お前ドラもん目指してんの？

神経へのリスクも軽微、専用のスーツを使うだけ。

そしてこれらすべての供給に入ってるのがこのコア、なのか？」

「……う、嘘……ホントに答えた」

啞然としているが舐めんな！スタークの看板背負ってるんでな。

てか

「お前、意外とすごかったんだな。ただのニートかと思ってた」

「失礼な！東さんは天才だよ！」

へえ〜名前タバネって言うんだ。

……あ、そうだ

「お前、俺の友達紹介してやろうか？」

「は？いきなり何言ってるの？」

「まあまあ、いいもん見せてくれたお礼にな？人目につかないところは……っと、あそこでもいいか。おい、ついて来いよ」

「あーちょっと……もう！待ってよ〜〜！」

さて、アイツに連絡すっか。

「……………で？何があるの？」

「あゝ、そろそろ来る」

「だから何が？」

「あ、来たぞ」

・ヒュ~~~~~~~~ウ ガンッ！ギャギャギャギャギャー！！・

何も無いところの地面がえぐれてこちらへ向かって来る。そして手前で止まった。

「わっ！な、何!?!」

「タチコマ、姿出していいぞ」

「はい」

ステルス迷彩を切ってタチコマが現れた。タバネは驚いた顔をしている。

「さっきの中途半端の色違い？」

「む!!あの子達と一緒にして欲しく無いな〜!」

「タチコマ、自己紹介しろ」

「了解 初めまして、思考戦車タチコマです!好きな食べ物天然オイル、特技はしりとりです!」

しりとりはお前がネットワークに繋げるからだろ!

「思考戦車?」

「AIで制御した小型戦車。コイツ自体のことだ」

「……………すごい」

「あ?」

「タチコちゃんすごい!」

は?タチコちゃん?

「おおぅ!?!タチコちゃんってボクのことかい?」

「そうだよ!私の名前は篠ノ乃東!よろしく!」

「東ちゃんだね!シクヨロシクヨロ〜」

……急にキャラ変わったよコイツ。タチコマもノリノリだし。そんなやりとりをしばらくボーツと見ていた。

-  
おふくろさんよぉぉぉ

つと俺の携帯だ。イワンからか……

「あい？」

《トニー、親父さんが来たぞ？話があるそうだ》

「マジでか、すぐ行く」

タチコマに乗って帰るか……ステルス迷彩あるし。親父何しに来た？

「タチコマ〜！帰るぞ〜！」

「え〜まだ束ちゃんとお話したいよ〜」

「したいよ〜」

「親父が呼んでんだよ」

「ハッ！？親父さんにはオイルのご恩があるんでさあ！！……………す  
まねえ束、しばしここでお別れだ！」

「お、おとつっあ〜ん！」

いつの間にもここまで仲良くなってるんだコイツら。

ああヤバい！遅れた時のイワンと親父の説教がヤバい！  
あのコンボは死ぬる！！

「オラ！さつさと行くぞ」

タチコマの搭乗部に下半身を突っ込む。

「ああ〜タチコちゃん……………」

振り返ればタバネが明らかに落ち込んだ顔をしていた。……………ま  
つたく。

携帯のストラップにしていたミニタチコマをタバネに投げる。

「え？」

「それやるよ、またどっかで会おうぜ？タバネ」

「また会おうね〜束ちゃん」

「……………あなたの名前は？」

名前か、このお忍びの姿での名前は……………そうだ、せっかく  
タチコマ乗ってるし。

「……………バトー、俺はバトーだ」

搭乗部に乗り込みステルスを起動して俺は親父のところへ向かった。

初めは行く気なんて全くなかった。  
箒ちゃんが誘ってくれたから仕方なくついていただけ。ちーちやんにも「たまには兄弟に構うのも悪く無いぞ?」と言われたばかりだった。

来てみればどうでもいいのがウジャウジャいてそれが気持ち悪くなつて箒ちゃん達と別れた。

展示してあるのもつまらないものばかり。まとも、というか中途半端だったのもウチなんかだけ。

庭園のベンチに座って時間をつぶすことにした。

そしたらなにかが話し掛けて来た、このベンチの空いているところへ座りたいそうだ。当然拒否、この場所を渡す必要がない。無理矢理座ろうとしたので改造スタンガンで対応。これで消えると思ったら改造した箇所を正確に指摘した。まあ正解したので座るところは許可した。

その後もしつこく話し掛けてきた。いい加減黙って欲しい。機械村というわけのわからない田舎者に今私がつっている設計図を見せる。どうだ、お前の頭では理解できない。

しかし十数秒でコア以外を完全に分析、把握した。コアの設計図を見せないで正解だった。

お礼に何か見せてくれるそうだ。少し興味がでた。

待っていて地面が削れて何事かと思った。いきなり姿を現したのは青色のウチなんとかと似た形をしたものだった。

似ていることの発言に本人（機？）は不満を言った。

名前はタチコマ。思考戦車というらしい。あまりの感性の豊かさに人間の脳みそを使ってるんじゃないかと思ったがAIらしい。ここまで発達したAIは聞いたことが無い。

興味深いその子を「タチコちゃん」と呼ぶことにした。タチコちゃんはノリが良く良い友達になれると思えた。

タチコちゃんとの楽しい時間もつかの間。別れの時が来てしまった。少し寂しく思っているとタチコちゃんを小さくしたストラップが投げられた。

投げた彼の名前を聞いた。

彼はバトーと名乗りタチコちゃんが消え去っていった。完璧な光学迷彩で。

来てよかったと少し思った。

「東、そのストラップはどうしたんだ？」

「ん〜？……ああ これ貰ったんだ〜」

「妹からか？」

「ん〜ん、このまえ行ったなんちゃらえきすぱんだ〜で知り合った人に」

「スターク・エキスポだ………しかし珍しいな。お前が他人と関わるなんて」

「いや〜面白い二人だったよ、それにコレはお守りなんだよ〜」

「ほう、どんなご利益だ？」

「ちーちゃん、それはね」

「

再会の約束だよ。

第四話 くスターク・エキスポ in ジャパン 散歩編（後書き）

次回、幻想入り

第五話　くおいでませ幻想郷（前書き）

小説がお好き？そりゃ結構！

てな訳で投稿でさあ。

IS？まあ待ちなよ、お客さんはせっかちなねえグエツヘツヘツヘ  
ツヘツヘ……………

まあキモいですね、それではどうぞ。そして駄文注意。

気が向いたらアンケートもご参加下さい。

## 第五話　くおいでませ幻想郷く

スターク・エキスポ　in　ジャパン開催より数ヶ月後……………

「ジャーヴィス、どうだ？」

「ダメです、未知の物質で構成されています。相応しい加工法が見つかりません。」

今俺は自分の家にいる。この家は親父からエキスポを無事成功させた俺へのプレゼントだそうだ。親父曰く

「別荘が余った…ゲフンゲフン！よく頑張った、新しい家でゆっくり休め」

とのこと。てか余ったって言いかけたよな！？

……………まあそういうわけで家を改造。新しいAI「J・A・R・V・I・S」（ジャーヴィス）を制作した。

ジャーヴィスは映画でも見たとおりのまんまだ。具体的に言うならタチコマのAIは「行動支援」、ジャーヴィスは「制作支援」といったところだ。部屋も3D投影による設計が可能になった。

で、学習方法はインターネットを介した自己進化にしたんだが……………

「加工方法のスレを立てましようか？それとも安価でアプローチを募集しますか？」

「やめれ！！」

オタク臭くなっちゃった。ことの始まりはたまたま繋げた2ちゃんねるやニコニコ動画（こっちの世界にもあった）。その情報を読み取りだんだんと毒されていってしまったのだ。

そのうえ声もアニメの声優の真似をして基本的に小山さんによるバラライカの姐御ボイスになってしまった。

能登さんボイスになろうとしたのを防いだ俺は頑張ったと思う。

そして今。俺は八雲さんに貰った塊の解析をしている。

塊の名前は「ヒヒイロカネ」。最初は錆びた塊だと思ったが曲がない、ひび割れない、熱しても反応が無いの三拍子が揃ったとんでもないやつだった。そしてジャーヴィスに解析させてたんだが……

「未知の物質、か。まさか本当だったとは」

「学園都市第二位でも会場にいたのですか？」

「垣根クンはこの世にいなえよ」

八雲さんはこのヒヒイロカネを幻想の一つだと言った。

幻想、それは非常識を指す。ならばその非常識なこれは非常識な、幻想的な方法で加工しなければならぬのだからだろうか？

「魔法使いにでもなってみるか……」

そう呟きながら渡された和紙を見る。簡単な地図何だが……地名が書いてないのでわからない。

だがこの幻想をもっと知りたい。そうすれば己おのれ、アイアンマンがもう一段階上へ行ける気がするのだ。

「……………よし、日本行くぞ！タチコマ、準備してくれ！お前結局観光できなかつただろ？」

「了解！今度こそフジヤマゲイシャを見るぞー！！」

「ジャーヴィスはここから端末支援！衛星を使ってこの地図に一致する場所を探してくれ！」

「了解、これより作戦を開始する。」

念のためアレも持って行くか……………

お忍びスタイルで日本に着いたと同時にジャーヴィスの解析が完了。タチコマに乗ってすぐに地図が示す位置へ向かった。しかしそこは山、山、山、ド田舎だった。八雲さんの名刺に住所がなかったけど、ここでやってるのか？

辛うじて見える長い石段を上り、ようやく鳥居が見えてきた。後ろにいたタチコマがへくと声を出す。

「すごいな、こんな山奥に鳥居があるなんて。地図には載ってない

よね？ジャーヴィス」

《はい、ネット上のWikipedia、日本地図にも記されていません》

ならこの先にあるのも幻想ってコトか？

やっと階段を上り切り、。目の前には一つの神社があった。大きくも無く、華やかさも無い簡素な神社。鳥居には「博霊」と書いてあった。

「博霊神社か。ジャーヴィス、該当は？」

《全く見つかりませんでした。》

「タチコマ、周りに反応あるか？」

「無いよ、あの神社の中も」

どういうことだ？ならここは一体……

そう思いながら鳥居をくぐった瞬間

世界が変わった。

「！？」

なんだ！？雰囲気ががらりと違っぞ！？

「おい、タチコ……………」

後ろを振り返ればタチコマが消えて、代わりに全く違う景色が広がっていた。

なんだなんだなんだってんだ！？

慌てて階段に向かう。

しかし、また鳥居をくぐったら

鼻先に魅惑の青いボディ

があった。

「へぶう！？」

そのまま顔面衝突、意識が飛びそうになってたがなんとかこらえた。

「ト、トニー君！一体何処行つてたの！？」

鼻血を抑えながらタチコマが言っていたことを把握する。

「俺は、消えていたのか？」

「うん！いきなりパツと」

《トニー様の反応が端末、衛星より突然消失しました。何が起きたのですか？》

消失、か。一度体験しているあの「扉」に引きずり込まれた感覚とは違う。アメリカから急に日本へ行った時と似ている。

違う場所に転送された？

もう一度くぐってみる、変わった。くぐる、戻った。

「……………ジャーヴィス、とりあえず俺の知り合い全員に『旅行に行ってくる』ってメール送つとけ、文面は任せた。俺の反応が消えたらこの場所を監視し続ける」

《かしこまりました》

よし、行方不明騒ぎになるのは押さえたな。

「タチコマ、ボーツとしてないで俺と手繋げろ」

「え、ええっ！？そんな大胆な！ぼ、ボクこんな体だけど……………  
いいの？」

「何気持ち悪いこと言ってんだメエエエ！？違っわぁ！！」

そんなボディで照れた動作しても全く萌えんわ！！

「手繋いで一緒に鳥居くぐるぞ！ハイそれだけ！」

「ブーブー甲斐性無し〜」

「うるせえ！」

タチコマのアームを握りながらまた鳥居をくぐる。同じく世界が変わった。そして隣にタチコマはいる。

「成功、か」

「ムムツ！ネットワークが切れたよ！ここ一体どこ？」

「ごきげんようトニー・スターク、歓迎しますわ」

この声は……………

「八雲さん？」

振り返ると鳥居の上に八雲さんが腰掛けていた、髪を下ろして服装も紫色のドレスを着ていた。頭にナイトキャップみたいなものをかぶっている。

「幻想郷へようこそ。中々面白いものを見せて貰ったわ……………まさかそのまま結界を飛び越えるなんて」

なんか…… エキスポの時はやり手のお姉さんみたいだったんだけど……

「しかも戻ることも出来てたし…… フフフツ、ホントにあなたへの興味が尽きないわぁ」

う、胡散臭ええ!!

すごく胡散臭いよバーニイ!!

「そ、そっちが素なんですか？八雲さんって」

「あら、それはわからないわよ あと堅苦しいのは無し。紫って呼んで」

「しかし…… わかりました、紫さん」

ん？なんか違和感が…… まあいいか。

「よろしい、素直でステキよ？」

「お褒めに預かり至極恐悦…… んで、ここは一体？」

紫さんは微笑みながら扇子を振る。何も無いところに切れ目ができ、それに入った。

そして目の前にその切れ目が出て開き、彼女が顔を出した。

「ここは幻想郷、名の通り幻想が集うところですよ」

…… アイアンマンの世界だと思ったらファンタジーだったと

は。

俺はこの世界がわからなくなってきた。

「おお！これがフジヤマゲイシャ!？」

違うよ!!

「まあ、立ち話も何だしご案な〜い」

ん？なにか浮遊感が……………

足元を見ると目だらけの空間が広がっていて。そこへ俺は落とされた。

「ボ、ボツシュートオオオオオオ!？」

目が沢山ある謎の空間を落ちていく、話が急展開過ぎてもう疲れた。

さて、冷静になろう。俺がそのまま落ちていたらどうなるか……………  
確かに何処かに落とされるだろう。

紫さんのあの目、確実に楽しんでたな……………  
そう思っていたら落ちる先に裂け目があり、その先に地面らしきものが見えた。

フツ、だがもう引つ掛からんぞ！

足が地面に付いた瞬間に膝を曲げ衝撃を吸収する。少しジンジンするが何とかなつた。

この間、わずか一秒！

「フハハハハ！引つ掛かつて漫画のようになると思ったか！もう何も怖く無い！！」

・ひゅううううううううううう

「は？」

「わー！どいてどいてー！」

見上げるとタチコ

・ガンツ！！！

「ほむうっ！？」

もう……………意識が……………と……………ぶ……………

「……………和風さを感じさせる天井だ。」

布団に寝かされていた。

知らない天井とでも言うと思ったか？残念だったな。

「あ、目が覚めましたか？」

横を見ると金髪のショートカットの女性が襖を開けていた、後ろの尻尾には触れないでおこう。そういう世界だって諦めた。

「紫様がお呼びですので、落ち着いたら隣の部屋に来て下さい」

「あ、はい」

服装を正して隣の部屋の襖を開けた。

「あら、もう大丈夫なの？」

「……………どの口が言いますか」

のほほんとお茶を飲んじゃってまあ

「タチコマは？」

「あそこ」

紫さんの向かいに座って指差した方を見るとネコミミ少女を乗せて遊んでいた。

「じゃははは！すごいすごい！！」

「ぶっぶっん、」から三回転!」

「わ~~~~~!」

楽しそうで何より。適応早すぎだろ？

「面白い絡操り（からくり）ね？進化し続けているわ」

「まあ、良いもん食わせたんですよ。天然オイルとか」

「粗茶です、どうぞ」

「ああどうも、えっと……」

「彼女の名前は八雲藍、私の式よ。タチコマちゃんと遊んでいるのは藍の式で橙ちえんと言っわ」

「式？」

「まあそのことを含めて説明するわね」

紫さんは扇子を開き口元を隠した。

「まずは私のことね……」

私の名前は八雲紫。この幻想郷の管理をしている『スキマ妖怪』ですわ。改めてヨロシク」

.....ようかい？溶解？妖怪！？

まあ妖怪の事を含めて紫さんの話をまとめると.....

昔々、世界は技術の嵐に包まれたッ！

妖怪達は発展していく人間社会に適応せず消え去ったかと思えた.....しかし、妖怪は生き残っていた！！

それが幻想郷ってわけだ。

「博霊大結界」ともうひとつの結界によって通常は囲まれており、現代で非常識、幻想となった物や妖怪達はここへ流れついてくるらしい。だが.....

「じゃあ何で俺が入れたんすかね？」

少なくとも俺は現代人だ、まあ色々非常識なのは作ったけど。それでも七ツの球を集める摩訶不思議アドベンチャーになるようなことはしていない。自惚れじゃ無いけど一応有名人だしな？

「そうね、そのことをを含めてここへ招待したのよ。」

確かに貴方は紛れも無く外の存在、だけどそれと同時に幻想とした認識できるの」

「つまり……………どういうことだってばよ？」

「……………忘れ去られていながら覚えられているといったところかしら。心当たりある？」

…………… あった、前世の　としての存在だ。こちらの世界では存在しない。つまり忘れるどころか知られていないもの、幻想だ。同時に俺はトニー・スタークでもあり世界中に知られている。則ち、幻想であり現実。矛盾過ぎる存在。

「あるのね……………」

しかも気づかれたし……………どう説明したのか。

「まあ深くは聞かないわ」

「……………こういうもんでハッキリさせる人だと思ってたんですけど」

「何もやましいことをしているわけではなさそうだし、そんな人間が一人いても問題ないわ……………でも」

空気が一気に重くなった、紫さんの口が笑っているが目が笑っていない。

「幻想郷に害を為すならば……………容赦しないわ。」

「りよ、了解」

空気が元に戻った。

「それでよし ごめんなさ〜いビックリさせちゃって」

ビックリどころじゃ無いと思うんだが……………心臓握られてた感じがしたぞ？

「まあせつかく来たんだから観光でもしていきなさい。タチコマちゃんもノリノリだし」

まだアイツ遊んでるのか？

「むむむ！これは伝説に聞く萌え装備『ネコミミ』ッ！…ここは桃源郷か！？」

「ひゃあ！タチコマちゃんくすぐったいよ〜」

……………声だけ聞けば女の子の絡みだが、実際に見てみると橙ちゃんがタチコマに襲われているように見えるんだよな。

「ウフフ、仲がよろしいことで」

「まあ、そうっすね」

まあ、不安はあるが楽しもつかね？

「紫様、お食事の準備が…ッ!? 貴様アアア! 橙に何を  
かアアア!？」

「へ? ちよ、わああああ!！」

「藍様——!？」

「……………藍」

「……………南無」

楽しむのか？

## 第五話　くおいでませ幻想郷く（後書き）

まあ解説とアンケート

主人公の存在意義についてですが、まあどっちにでもなるってことです。適当すぎますね。ちなみに

常識（現代）：IS、アイアンマン、束、千冬さん、トニー

非常識（幻想）：霊力、妖力、神力、魔力、幻想郷の人達、トニー

って感覚です。

それではアンケート、ご希望の順番に並べて下さい。深夜零時までです。

?：ゆかりん監督の下（遊ばれて）能力発動、そして練習。

?：観光スタート人里で食べ歩き。オイルはどこだ？

?：こちらスネーク、妖怪の山に潜入した。河童との接触に移る。

感想板にどうぞ。なかったらサイコロで決定。

第六話 くら相応しき力くら（前書き）

さあ、始まるザマスよ！

いくでガンす！

ふんがー！

なわけで駄文注意。

恋愛、友情表現は難しかとです。

HAHAHA！ノープロブレム！って方はどうぞ。

## 第六話　く相応しき力く

「橙をたぶらかしたヤツの責任はコイツに負わせる!!」  
（よろしくお願いします、一応加減しますのでご安心を）

「藍、心の声と建前が逆になってるわよ……………」

「あれ？橙ちゃん変なコトされたの？」

「ん〜覚えてないなあ。タチコマちゃんは？」

どうしてこうなった……………」

どうしてこうなった！

どうしてこうなった　どうしてこうなった

そんなことを頭に浮かべながら俺は現実逃避していた。

思い返すは一時間前……………」

あのあと紫さんの屋敷にしばらく滞在することになって次の日の朝  
食を食べた後のことだ。

俺は紫さんに呼ばれた。

「トニー、貴方ってどのくらい強いのか？タチコマちゃん無しで」

「そうっすね……………一応鍛えてましたけどそんなには。一般人以上  
軍人以下、ですわね」

スーツ抜きでな？あれは反則だ。マーベルのコミックではキャプテンアメリカに鍛えて貰ったそうだが、キャプテンアメリカは噂程度  
でしか聞いていない。

「そう……………このままだと一人じゃ死ぬわね、貴方」

「……………そこまで危険なんですか？幻想郷」

「ええ、人里なら大丈夫かと思うけど、それ以外の場所には妖怪が  
うじゃうじゃいるから」

「あゝ、そして人間はすぐ襲われると」

「その通り、貴方は普通の人間（笑）だし……………」

なんかけなされてる気がするぞ？てかニヤニヤやめい！！  
あ、そういえば

「幻想郷の説明の時に聞いた『博霊の巫女』は人間だけど戦えるん  
ですよ？やっぱり退魔術って感じのやつを使ってるんですか？」

「そうね、秩序を保つ存在だから絶対的に強いわ。それに能力もあるし」

「能力？」

「個人的な技能みたいなものよ。一定のものを操る、扱う、司る、そういつた『程度』の能力を一部の幻想郷の住人は持つてるわ。例えば私の『境界を操る程度の能力』、とかね？」

「境界？」

「そう、境界。物理的なものだけじゃ無く概念的なものまで。

ここで出会った時に私の下の名前がすんなり出たでしょう？貴方と私の間にある『友好の境界』を操ったのよ」

何というチート、管理者の名前は伊達じゃ無いのか。

しかし能力か……………自分にも付くもんかね？想像できんな、科学一筋だし。

「じゃあ幻想郷を歩く前に鍛えておく必要があるってことですかね？」

「まあ貴方みたいな面白い人間が死ぬのも嫌だし、その必要はあるわ」

「やいで……………」

鍛えるねえ…………腕立て腹筋背筋やるだけなのも時間の無駄な気がする。

「あつ。いいこと思い付いたわ」

………一日二日の付き合いだけど何故だろう？この人はろくな事  
言わねえと予想できる！

「貴方、ウチの子に鍛えて貰いなさい」

来たよホラ！

「あ、あの俺は自分で」

「藍でいいわね、調整上手いし。ら〜ん！ちよつと来て〜！」

紫さんが呼んですぐに藍さんが割烹着姿で出て来た。皿洗い手伝え  
ばよかったかな？

「はい、何でしょう？」

「トニーを死なない程度に鍛えてやってくれない？このままじゃ幻  
想郷ですぐに死んでしまうわ」

「あの〜紫さん？藍さんも忙しいし俺は」

「わかりました、屋敷の外の空き地でよろしいですか？」

「ちよ、藍さ」

「ええ、橙達と見に来るから結界も張っておいて」

「だから俺」

「すぐに行きますー！」

気づいたら藍さんはもうおらず、紫さんが心底楽しいと言わんばかりの顔でこっちを見ていた。

「……………自主練じゃダメっすか？」

「ダメ」

そして今、向こうで殺気満々な藍さんが目の前にいる。

ホントにどうしてこうなった！俺がなにをした！？

「あ、あの～藍さん？どうしてそんなに怒ってるんでしょ？  
？」

「……………タチコマと言ったか」

「え」

「奴め、私のかわいい橙をたぶらかしている」

俺と藍さんの周りに広く張られた結界の外を見ると、タチコマの上に橙がちよこんと座っている。和むなあ。

「あの青狸、昨日来たばかりだというのに橙にあそこまで近づきおつて……………橙も気付いたらタチコマちゃんタチコマちゃん、今朝な

んて一緒に食べていたぞ!？」

だから橙が朝食の時いなかったんだ。

「どうにか引き離したいところだがそれだと橙が悲しむ。その鬱憤、晴らすずであるべきか!！」

ああ、成る程。つまりコイツは……

「……… 思いつ切り逆恨みじゃあねえか!？」

「ええいうるさい!お前もお前だ!ちゃんとした教育をして大人しめの子にしろ!！」

「ちげーよ!あいつが勝手にああなったんだよ!このモンスターペアレントが!！」

・ガッ!!!

「なむっ!?!」

「こんっ!?!」

俺達の頭の上にスキマが開き金タライが落とされた。紫さんが呆れた目で見ている。

「あゝまあどうでもいいけどさっさと始めるわよ?」

「……… っいつす」

「……… はい」

よろしい、と言いながら紫さんは扇子を上に掲げた。

「じゃあ妖怪の襲撃体験、始めっ」

・ジュッ・

始まった瞬間、頬を何かがかする。少し切れて血が出てきた。自分の顔が引き攣っているのが分かる。

向こうでは親バカ、藍さんが凶悪な笑みを浮かべながら手の平を突き出していた。

「今のがスタンダードな攻撃方法だ。他にもレーザー、爆発、ばら撒きの種類がある。」

藍さんの後ろに大量の光の玉が浮き出る。

「なに、手加減はするさ………気を抜いたらアレかもしれんが」

それは死にかける程度の攻撃をするわけですね、わかります。

「さあ、じわじわと鬨り殺しにしてやる！」

「もう本音を隠す気もないわね」

おっしゃる通りです紫さん。ああ、なんかオワタ。藍さんの後ろに戦闘力53万の方が見える。

「避けるなあああ！！！！」

「ふざけんなああああ！！！！」

始まって30分、トニーはまだまだに逃げ続けている。所々かすつているが決定的なのは貰っていない。

なんだ、意外とやればできる子ね。

というか緊張感をだすために藍の彼に対する純粹な「怒り」をごく少しだけいじくったんだけど……………

「死ねええええええ！！！！」

「ぎゃああああああ！！！！」

……………まさかここまでなるとは思わなかったわ。  
橙の事が大切なのは分かるけど、藍も割とあの子に依存していたの  
ね。

さて、彼の体力もそろそろ限界かしら。息も上がってるし血も大分流したようね。ここまででは計画通り。

私は扇子で隠した口を歪める、着々と進んでいく様子を見ながら。

ランナーズ・ハイというものがある。マラソンを長時間行くと脳内にエンドルフィンという麻薬が分泌され走者に高揚感を与える現象だ。

日本では「走禪そうぜん」と呼べる似たようなものがあり走る内に一時的な悟りを開ける。

そして彼は今藍の殺意（という名の八つ当たり）が籠った攻撃を必死にかわしてまさにその状態に差し掛かっている。精神も極限まで高められ血潮が激しく流れているようだ。

さあ、後は彼の精神の引き金を引くのみ。撃鉄はもうすでに起こされている。

トニー・スタークの放つ「弾丸/能力」はどのようなものか。

藍さんの猛攻が始まって30分。てかマジで殺されそう。

足とか腕とか牽制が全く無く、胸、頭、金的といった明かなワンキル攻撃。

死ぬわけにもいかねえから避けてますよコンチクショー!!!

「避けるなあああ!!!」

「ふざけんなああ!!!」

ほんとふざけんな!何が体験だ!実技だよこれ!?



司る

「つかさどる」

カチリ

引き金を引く音が聞こえた。

- ようやく覚醒したか、馬鹿者が -

意識が完全に落ちる直前、崎守さんの声が聞こえた気がした。

「藍ッ！やめなさい！！」

まだ覚醒しない……このまま長引かせるのは危険だわ。  
今日はここまでね、まあいいトレーニングになったでしょ。  
境界を元に戻して式で命令する。

「ガアアアアッ！！死ねエエエ！！」

も、戻らない！境界の干渉も弾いている！何が起きているの！？



くれるわ。

藍の暴走も気になるけど、今はこの場を納めましょうか。

ねぎらいの言葉を考えながら結界を解く。

「藍、トニーお疲れ様。今日はここまでにしましょう」

「……………」  
「……………」

しかしお互いに睨みあっている。まったく……………」

「藍、私お腹空いたの。主人を待たせるつもり？」

「……………」  
「……………」

あれ？もしかして無視？やばい、ゆかりんちよっと焦ってきたわ。

「ん？あれ？？」

橙を乗せたタチコマがトニーへ近づく。

どうしたのだろう？

「コッチも……………」

次は藍の方へ行く。

「ねえ、橙ちゃん。これって……………」

「うん、そうだね」

橙がタチコマから下りて私へとテトテ近づいてきた。

「紫様も二人とも目を開けながら気絶しています」

「……………はあ」

……………なんだか疲れたわね。

紫が二人をスキマで屋敷へ送り、橙とタチコマを連れて帰る様子を上空から見ている者がいた。

「気付かれ無かったか。いくら境界を操作する者でも私とは『位置』が違っからねえ……………」

手元にある数枚の黒のカードをシャッフルする。

「本来は『鉄を操る』程度だったが、まあアイツが開いたお祭りも面白かったし『金属を司る』ぐらいサービスしてもいいだろう。奴自身のストックはまだ一つ残ってる。」

纏めたカードを一枚引く。そのカードには狐の絵が描かれていた。狐のカードが白く光り消えていく。

「しかし覚醒を後押しするために九尾の小娘の精神をいじくったのはちよつとまずかったな。良い忠義の心が見えたよ」

カードがばらまかれ大量に増えていき、覆うように包んでいく。

「次の試練、お前はどうか魅せてくれるんだい？　。いや、トニー・スターク」

完全に包まれて消え去る直前、その人物が来ている服にはこう書かれていた。

・レンタル専門店・アカシックレコード・

「和風のシックなスタイルを感じさせる天井だ」

「目が覚めたか、そして突然何を言っているんだ？」

伝統行事だと思つたよ、天井シリーズ。

気が付いたら前回と同じく布団で寝ていた。顔を横にすると藍さんが正座で座っていた。この角度だとお胸が大きいのが分かる。って

「あり？藍さんどうしたんすか帽子」

今の藍さんは今まで見たナイトキャップみたいなのを付けておらず、

整った形の獣耳が出ていた。

「帽子は私と紫様の主従契約の装置みたいなものでな？今回私が途中で暴走してたようだから今は紫様が調整中だ」

成る程、コードギアスみたいなものか。

「だから私は今は一介の獣に過ぎん、だからお前と正直に話せる。敬語も要らん、藍でいい」

美人に言われたらそうするしかあるまい！

紫さん？ありや例外だ。胡散臭いもん。

「わかった、これで良いか？藍」

「ああ、それで……………その……………すまなかった」

藍が頭を下げる。お胸様が揺れる揺れる……………いかな、起きたばかりで頭がおかしい。

「一時の感情に身を任せてばかりか暴走してお前に深手を負わせてしまった。本当にすまない」

言われてみれば全身ズキズキと来る。筋肉痛と大量のかすり傷のせいでない。

……………そんなことより

「お前何でそんなビクビクしてんの？」

言われた瞬間藍の体が大きく震えた。

「……………私は、橙の主どころか紫様の従者失格だ」

……………

「お前より先に目が覚めた時に橙に心配されたよ。主である私が気を配る立場なのに」

……………

「紫様にも今日の食事は作らずここで休めと言われた。主の下で仕事をするのが従者の役目だった」

……………

「何百年と従者として過ごし、怒られ、注意もされたりした。けどこんなことは初めてだ」

……………

「私はもう愛想を尽かされたのかもな……………」

藍が目には涙を浮かばせている。コイツは尊敬して紫さんに付いて来たんだらうな……………

……………だがなあ

俺は痛む体を鞭打って起こし藍を見据える。

「トニー？」

藍の鼻先へと顔を近づける。

「どうした？か、顔が近いぞ」

そして俺は……………藍の両耳をつまんで引っ張り上げた。

「ひゃあっ！？な、何を」

「おいコラ、お前本当に俺の親父の十倍生きてんのか？

お前は勝手に落ち込む恋する乙女ですかコノヤロー」

「だが私は……………痛い痛い！」

「だかもベガモアルマイルもあるか、馬鹿たれ。さつきからネチネチネチネチ、ネチりすぎだ」

親父やイワンの説教よりもキツイわ、こんな暗い独白。

「てかお前さあ、紫さんと橙のこと嫌いなのか？」

「な、違うー！」

「じゃあお前にとっての紫さんと橙はどんな存在よ？」

「そ、それは……………紫様は尊敬する素晴らしい御方で付いて行きたい  
と思える存在で。橙は私の言うことを素直に聞く、真っ直ぐでいい  
子だ！」

何だよ、すっかり目を見て言えるじゃんか。なら……………

「なら、そんな紫さんと橙が簡単にお前を見限ってばいっちょする  
のか？」

「あ……………」

「勝手に疑心暗鬼になるなよ、直接聞いてないくせに」

「……………」

「橙はただお前を心配して、紫さんは暇を与えただけ。そんなだけだ  
ろ？」

「そう、なのか？」

「そうだよ、そうに決まってる。つーか紫さんが今まで心配してオ  
ロオロしたのを見たことがあるのか？あつたら気持ち悪い、絶対裏  
があるね。それにお前のかわいい橙ちゃんの内心ほくそ笑んでるな  
んてサスペンス劇場ものだ」

橙がデスノートの月みたいな顔で「計・画・通・り」ってしたらビ  
ビるわ。

「……………フフ、確かにそうだな。数百年の内そんな紫様を一度も見  
たことが無い」

調子が戻ってきたみたいだな、雰囲気が落ち着いた。

まあ、無事解決、かな。

「まさか十五、六の若造に諭されるとはな。この私が」

「人間、あんたらより一生が短いからな？育ちが早いんだよ。橙だ  
って俺より歳食っててあの子供っぽさだろ」

「紫様は？」

「あれは規格外。てか体が痛え、寝る」

「私も耳が痛かったぞ………まあ、ゆっくり寝るといい」

「おう、お休み藍」

「ああ、お休み」

目をつぶって訪れるまどろみに、俺は身を任せて眠った。  
藍がそつと俺の頭に手を置いてくれてとても落ち着いた。

翌日の朝、朝食にて。

「藍、その醤油とってくれ」

「わかった………ほら」

「ん、サンキュ」

「……………紫様」

「……………どうしたの？橙」

「この魚おいしいな、和食も良いもんだ」

「そう言っつて貰えると嬉しい。……………ん？おいトニー、頬っぺたにお弁当（お米）が付いてるぞ」

「え？どこ？」

「ああそこじゃなくて、まったく」

・ヒョイツ、パク・

「む、おいしい」

「……………むう、嫉妬しちゃいます」

「……………ふふ、そうね。式を付けてもあれだもの」

「藍はいい嫁さんになるな」

「……ま、まあお前がいき遅れたらなってやるさ」

「ま、そんな時は頼むわ」

「……………砂糖吐きそうです」

「……………私も」

「あれ？今日のオイルは何だか甘いぞ？」

庭先でそう呟く夕チコマであった。

第六話 く相応しき力く（後書き）

崎守さんは世界の崎守さきもりです。

藍さんはおっぱい一位です。

よしんば二位だったとしても…世界、一位です。

元ネタがわかる人はナカーマ

わからない人もニコニコ大百科で八雲藍のページを見てみよう！

そんな訳で次回は人里へ……

Special thanks!

小説好き さん

第七話 〱人里道中膝栗毛〱（前書き）

ええ、私はアリスが好きですよ。ロリスの時から片思い中ですわ。

そんなアリスへの想いを胸に駄文及び独自設定注意。あとキャラ崩壊。

「壊れまくってもいいんじゃないやねえ？」と隣の家が突然破壊されてもスルー出来る方はどうぞ。

## 第七話　く人里道中膝栗毛く

能力が覚醒、そして藍との和解より二週間後……

八雲の屋敷外の空き地にて。

「ハアツ!!」

藍の放つ大量の弾幕が飛んで来る。前までは避けるだけだったが今は……

「オラアツ!!」

目の前に長方形の鉄板が出て、体を守り

- ガガガガガン!! -  
弾幕を防ぐ。

一週間前まではここまでだった……だが。

「お返しだッ!!」

小さい鉄球を大量に出し前方に打ち出す。今ならある程度の弾幕を放つことが出来るようになった。

「まだ直線的だな」

藍が空に飛んで避けまた弾幕を放つ。

だが時間は稼げた。俺は避けながら右の拳を突き出す。

「B l a s t o f f ! ! (ぶつ飛べ!!)」

巨大な鉄の円柱が拳の先から現れ、弾幕を掻き消しながら藍がいる方向へと飛んでいく。威力は計算上ダンプカーの衝突以上の筈だ。

「や、やったか？」

「やってない」

そんな死亡フラグ満々の言葉を言う俺に藍は容赦無く大玉の光球をぶち当てた。

「あゝ今日は結構自信あったのになあ……」

「直線的だと言っただろう、次は方向を考える」

模擬戦が終わり、今俺達は朝食を摂り同時に反省会を行っている。能力が目覚めて以来、毎朝藍に能力の練習に付き合っただけで貰っているのだ。

「お前の能力は強力なんだ、ちゃんと有効活用しろ。」

覚醒した能力は「金属を司る程度の能力」。名の通り金属に関わることは何でも出来るというエンジニア系の俺としてはかなり嬉しいものだ。

能力を使つてヒビイロカネの加工にも成功、さら金属類を生成することも出来た。

ただ生成の際には霊力を消費するので注意がいる。最初の頃は霊力が少なかったクセに調子に乗ってヒビイロカネを生成、そして昏倒し藍にかなり怒鳴られた。

霊力が生成を繰り返して徐々に増えていくのは重畳だった。

そして今、藍先生の下毎朝修業中ってワケなのだ。紫さんは面倒臭いとのこと、丸投げすんな。

「おい、トニー聞いているのか？」

「ん、聞いている聞いている」

「……………言ってみる」

「そろそろ結婚しようかどうかだろ？」

「聞いて無かったんだな。もう一回言っぞ」

スルーすんな、悲しくなる。

「……………まったく。霊力だ、霊力。どのくらい増えた？」

「どのくらいって、あんましわからんよ。感覚でこれくらいって感じだし。屋敷に俺以外の比べる人間が居ないだろ？」

「それもそうだな……」

「霊力がどうかしたのか？」

「いや何、私と同じようなものを教えようと思ってな。お前の能力で一々鉄を出すのもきついだろう？」

藍が使ってるやつ？あのレーザーや球みたいなのか？

「あれってお前の能力じゃ無かったんだ」

「違う違う、あれはある程度の霊力、魔力、妖力などがあれば使える」

なるほど、だったらちよつと集中してつと……

「こんな感じか？」

ポン、と目の前に手の平から黄銅色の光球が出た。

藍が驚いた顔をしている。

「驚いたな、今初めて出したのか？」

「まあな、ここ二週間沢山撃たれたから感覚は掴んだ。」

「フフ、流石だな。まあその霊弾を弾幕で放つてだな……」

「必要に応じて能力を使った攻撃ってことか？」

「その通り」

なるほどなー。

霊力の消費も少ないみたいだし、次からはそれでいってみようか。

「らーん、おはよー」

紫さんが寝起きの格好で食卓に入ってきた。

ネグリジエがはだけて中々扇情的な……

「フンツッ!」

・ブスツ・

ああ、目が……目があああああ!!

「紫様おはようございます。食事は少な目でよろしいですか?」

「ん〜と、ええ、それでいいわ。ってトニー、転げ回ってどうしたの?」

「紫様、そんな破廉恥なやつは放っておいていいです。味噌汁をどろぞろ」

「?……まあいいわ、ありがとう」

その後一緒に寝ていた(片方はスリープモード)タチコマと橙が入り朝食終了。藍と一緒に皿洗いをした。

昼の縁側。特にやることも無くタチコマとボヘーツとしていた。

「暇だね」

「暇だね」

ここ、八雲の屋敷は普通は来れない場所らしい。なので俺もここを出て別の場所へ行く方法がわからず、半ば居候化している。

大体そんな日は橙に模擬戦を挑んだりしていたのだが、橙はマヨヒガという場所で猫の集会があるらしくいない。なのでタチコマも同様に暇なのだ。

「タチコマ、バッテリー大丈夫か？」

「『アレ』も入れてるしまだまだパーペキだよ」

「武器のメンテナンスは必要か？」

「オイル貰ってるから自分でやったよ」

会話が切れる。タチコマも話題がないためアームの指を付き合わせていた。

「あら、退屈？」

「そうなんすよ紫さん」

スキマから現れた紫さんが隣に座る。

「ある程度強くなれたようね？」

「まあ不慣れなところも多いんですけどね？大体能力の扱いもわかってきましたよ」

夕チコマに手を置き、装甲の金属を操作して攻殻機動隊の「笑い男」のマークを刻んだ。紫さんは「お見事」と笑う。

「フフフ……これなら幻想郷を出歩いて大丈夫みたいね？夕方に迎えに来るから」

そう言いながら紫さんは閉じた扇子を縦に振った。  
アレ？その動作ってまさか、てか迎えて

「またボツシュートオオオオオオ！？」

俺の叫びは虚しく響いた。ちくしょう。

「あ、紫様。トニーを見ませんでしたか？」

「あら、何か用でもあったの？」

「いえ、仕事が終わって時間も空きましたので靈力の扱いについて少々教えようかと……………」

「あらあら、大分お熱ねえ〜」

「なっ!?!ち、違います!」

「でも残念。彼なら今夕チコマちゃんと一緒に人里へ送ったわ」

「……………そうですか」

「ほぐらやっぱり残念そうな顔をするう〜」

「うぐ、からかわないで下さいよ!」

「夕方には連れ戻すんだから、そんな顔しないの。笑ってお昼ご飯作って頂戴」

「……………はあ、わかりました。少々お待ち下さい」

「……………さて、彼はどうなったかしら?面白くなってそうね」

落ちる、またもやこの謎の空間を落ちる。しかも

「だあああッ!?!夕チコマあ!?!てめえくつつくんじゃねえ!?!」

「いやだいいやだいい!?!ボクをキズモノにした上に突き放すなんて!?!後ろから刺されるよ!?!」

「装甲の表面いじくっただけだろおが!?!後で戻してやるからまず

は

「あ、地面」

「へ？」

・ゲキリ・

……………この足にくる感覚は。

「痛えエエエエエエ！！両足くじいたアアアア！！」

「まったく、男の子が情けないなあ」

「何『まったくコイツは』みたいな態度取ってんだ！？お前のせいだろーが！！」

「はいはいわかったわかった」

こ、こいつ！日に日に生意気になってやがる！

いや、落ち着け俺。余裕を出すんだ余裕を。Be cool、心頭滅却すれば痛みも……………無理でした。

「しょうがないな〜トニー君は。ホラ、乗せてあげるから  
そういつてタチコマが俺を持ち上げて……………」

「そこの青い妖怪！止まれ！」

頭に弁当みたいなのを乗つけた青い服のお姉さんがいた。誰だ？  
夕チコマも静止している。って落とすな！！

「その君、大丈夫か！？すぐに逃げるんだ！」

かっこよく言うお姉さん。だけど妖怪？何処にいるんだ？

「青い妖怪なんて失礼な！？ボクは思考戦車夕チコマだよ！！」

ああコイツか、確かに青いな。

「死光仙者だと！？なんて危険な名前の妖怪なんだ！！」

「違う！絶対漢字が違うよ！！」

そういつて言い争いを始める二人（？）。まあそれよりも……

「足がヤバいからはやく助けてー」

足首が紫色になり始めていた。

「すまない、里の見張りの者が誤解していたようだ。まさかからくりの類だったとは……………」

あの後俺が事情を説明、そして誤解が解けた。

このステキなお姉さんは里の守護をしているらしく、人里の見張り番の人から通報を受けて来たそうだ。

「まあ遠目で見れば仕方ないっすよね。お姉さんもお仕事ですし」

「だから言ったじゃないか、思考戦車って」

今俺はタチコマの上に座っている。

人里にあるお姉さんのお宅で足首の治療をしてくれるらしい。

是非ともお願いしますってことで俺達はホイホイついていってしま  
うわけだ。

そんなこんなで今人里の中を進んでいるわけだが……里の人達の視線がすげえ。

まあ敵意じゃなくて好奇心のような感じだからいいが。何かくすぐ  
つたい。エキスポの時はどうだったって？アレは多過ぎて逆に大丈  
夫だったよ。

「ハハハ……まあ外人自体も珍しいが。その、タチコマがな？」

お姉さん、そんな苦笑いのフォローは止して下さい。

「おお！やっぱりこの魅惑ボディのせいだね！！やっぱりボクって  
罪作りい」

いいえ、違います。

そして着きましたお姉さん宅。普通の田舎に出てきそうな民家だっ

た。

居間に入ってすぐにタチコマの解析を行いながら手当してもらった。

「くるぶしのちょっと下が一番痛んでるね、少し強めに巻いていいよ。」

「わかった……えっと」

ああ、そついや互いに自己紹介してなかったな。

「トニーです、トニー・スターク。気軽にトニーとでも呼んで下さい」

「ああ、私も名乗ってなかったな。私は上白沢かみしろさきわけいね慧音、慧音でいい。じゃあトニー、ちょっと我慢してくれ」

アイタタタ、ちよつち痛い。

そして屈んでいる慧音さんを見たら

谷間が見えました。

ええ、谷間ですよ読者の皆さん。前世では全く無かったシチュエーションです。崎守さんはちっぱいだっし。

痛みも忘れしばらくはこの男の幻想郷をば……

「あ、けーねさん。おっ い見えてるよ」

堪能できなかった。

バツと顔を上げる慧音さん、そして目が合う俺。

目と目が合う瞬間好きだと気づく事もなく5秒ほど見つめ合う。

ゆらありと、顔を真つ赤にした慧音さんが立ち上がり。体を思いつきり反らして……振りかぶった。

-ゴオン!!--

頭突きを頂きました。てか夕チコマ空気読め。

たんこぶの代償に足首の手当てが終わり、俺は慧音さんにお礼を言つて人里を観光することにした。大体歩けるぐらいは回復した。

見た感じ江戸の町?と言つたところだろうか甘味処や呉服屋、雑貨屋等があった。

紫さんは夕方に迎えに来るそうだが……時計を確認するとまだ昼を過ぎたばかりだ、空が赤くなるのもまだまだである。

昼食を食べていなかったのでもたまたま見つけたうどん屋で済ませた。お腹一杯になりまた当ても無く歩いていると、広場らしきところに人だかりが出来ていた。

気になって中心を覗いてみると、美しい金髪の少女による人形劇が行われていた。

ただの人形劇では無い、何かの術式を使ったやつでデフォルメされた人形達はまるで生きているようだった。

「わあ、すごいね！」

タチコマもその劇を楽しんでいた。俺もだけど。

人形劇が終わり、少女と人形達が一礼する。パチパチと拍手が起った。

少女の足元にあるカゴに集まっていた人達は小銭を入れていき散っていく。

最後に自分達が残ってしまったが幻想郷の貨幣が無いので拳大の金を生成した。こんな良いもの見せられて払わないなんざ男が廢る！

「コツチの貨幣を持って無いからコレで頼む。面白かったよ」

「あら、なら貴方は外人？」

「ま、そんなトコだ」

後ろにいたタチコマが身を乗り出す。

「すごく面白かったよ！あの子達生きてるの？」

「いいえ、魔法の糸で操っているのよ」

少女は軽く手を振る。下に並んでいた人形の一体が飛び出して少女の肩に乗り「シャンハイ」と声を出した。タチコマは「上海？」と体を傾けた。

しかし魔法の糸か、もう幻想郷は和洋折衷何でもありだな。

「驚いたな。全部一人でやっていたのか、コイツ（タチコマ）みた

いに自分で勝手に動いてるみたいだったぞ？」

「今度はちゃんとしたお金で払うよ」と言いながら立ち去ろうとしたが……

「ガシッ！！」

うでが すさまじい ちからで つかまれた！

引き彎った顔で首を動かすと少女が掴んでいた。

「ちょっとお時間空いてらっしゃる？」

その時の笑顔は素晴らしいものだったが、俺にはとても恐ろしく見えた。

「ニューロチップとかAIとかよく分からないけど、外の世界の技術はすごいよね」

人里の喫茶店。優雅に目の前でコーヒーを飲んでいる少女アリス・マーガトロイドに今俺は根掘り葉掘り色々と聞かれている。ちなみに俺は紅茶。

「しっかし『自立して動く人形』、ねえ。見たことあるのか？」

「昔に何度かね。ごく僅かだけど」

「一見可愛い少女なのだが本人曰く「魔法使い」らしく結構長生きしている。そして自分で考え、自分で勝手に動く人形を見たらしくそれを作りたそうだ。」

「そしてまたその類を見つけたわ」そう彼女が指差す先には……

「ねーねーオイル無いなら油ちょうだい」

「あの、オリブオイルなら……」

「お、じゃあそれをティーカップに入れて来て！」

「は、はい」

「一度やってみたかったんだ〜アフタヌーンティー」

店員さんにアホな注文を吹っ掛けているタチコマがいた。

「あの馬鹿……」

「まああんな姿をしているけど……人間くさい動き、仕草、考えを持っている。私が作った人形でもまだ半自立なのに、どういう理論であれを作ったの？」

「どういう理論、か。まあ細かい機械部品の話じゃなくて大まかな仕組みで言うと……」

「学習させるんだよ」

「学習？」

「そ、学習。ただ覚えるだけだったら情報が蓄積されていくだけだ、

だからその知った情報を考えさせるようにしてる」

「それで何が起こるの?」

「赤ん坊は目に入る情報を言葉に出さなくとも考えている。あれは何?どんな感じ?ってな。そしてそれを繰り返していく内に『価値観』ってやつが生まれる。その価値観が自分の思考にくつつくとうなると思う?」

「…………『個性』になるってこと?」

「その通り、アイツは作った頃からある程度の会話は出来ていたが今のような感じじゃ無くてな?カチコチの、まだ『赤ん坊』だったよ」

「ふうん、じゃあ貴方がお父さん?」

「今じゃ悪友みたいなもんだよ」

「んんゝマンダム」と言いながらティーカップに給油チューブを刺し、オリーブオイルを飲んでいるタチコマを見てアリスとお互いに笑った。

楽しいティータイムも終わり、アリス持ちで勘定を払って貰った後人里の入り口まで一緒に来た。彼女は先にある「魔法の森」に住んでいるそうだ。

「今日はありがとう、目標へかなり前進したわ」

「かわいいお嬢さんのためだ、構わねえよ」

「フフ、ありがとう」

夕日に赤く染められながら彼女は微笑む。

自然に笑った顔は初めて見るな？腕を掴まれた時の獲物を見つけた顔だった。

「そういえば：貴方は何処に住んでるの？外人みたいだしまだ宿が決まって無いでしょう？良かったら……」

「迎えに来たわよトニー、タチコマちゃん」

俺とアリスの間に突然紫さんが現れた。「夕方に迎えに来る」とは言ってたが突然スキマから出て来るのは勘弁な！

「八雲紫？」

「あらあ？都会派の魔法使いさんじゃない。ごきげんよう」

「ごきげんようじゃないわよ………知り合い？」

「まあ、居候先の家主？みたいな」

「まあそういうワケですね。彼は観光で来ているの」

「観光………って。外に帰るつもりなの？」

「帰るって言うてもまた来るけどな？」

外に帰るからどうなんだ？質問は大体答えたぞ？

八雲さん、アンタは何「あらあら」とか言ってるんですか。すごく胡散臭いです。

「藍が夕餉の準備をしているわ。もう行くわよ」

大きなスキマが開かれる。

「先に行ってるわね」。タチコマちゃんには高級オイルがあるわよ「ホント!？」と紫さんとタチコマが入って行った。

「んじゃ、俺も行くわ」

「そう、じゃあさようなら」

「おう、またな。アリス」

短い言葉を交わしてスキマへ入って行く。

「……………またね、トニー」

僅かに聞こえた言葉に俺は軽く手を上げて応え、スキマは閉じた。

「ただいまっ。お、良い匂いじゃん」

「ああ、お帰りなさい。もう配膳は終わってたぞ」  
「分かった、手洗い洗ってくるわ」

「うふふ」

「何ですか紫様」

「もう完全に新婚さんみたいだな〜って」

「な〜!.....も、もうそのネタには振り回されませんよ」

「でも藍、私見ちゃったのよ」

「はあ?何を」

「人里でトニーが女の子とお茶会をしていたところ」

「ガシツ!! メキメキメキ.....」

「ちょ!藍!?痛い痛い!!指が食い込んでる!!」

「紫さまあ?ちょっと詳しくお聞かせ願えないでしょうか?あ、夕チコマはオイルをあげるから橙と食事を自分達の分だけ持って隣の部屋で食べといてくれ」

「はあ〜い。橙ちゃん、行こう!」

「う、うん」

「さあ、教えて下さい。ナニガアツタノカラ.....」

「.....藪蛇ね」

「いや〜洗面台がわからなかったから井戸で洗ってきたわ」

「そうか、それは大変だったな。今度案内しよう」

「おう、あんがと。それでメシは?」

「それだ」

「.....あの〜藍さん?これは紅茶という飲み物ですよ?しかも『午後の紅茶』のボトルだし」

「残念ながら紫様や橙がほとんど食べてしまっただけ?これしか残ってないんだ」

「いや、さつき手を洗う前まではたくさんあ」

「残ってないんだ」

「だから」

「残ってないんだ」

「えっ」

「残ってないんだ」

「……………イタダキマス」

「ああ、存分に味わうといい。人里でお茶会をするほど好きなんだ、残すなよ？絶対にだ」

その後トニーは紅茶ゼリーや紅茶饅頭を大量に食べさせられ気絶。

その時の記憶は紫の慈悲で軽く封印されたが、紅茶を見たり匂いを感じる度にトラウマが解放されるようになってしまった。

## 第七話　く人里道中膝栗毛く（後書き）

補足たくいむ

- ・ 時期は紅魔郷より前。理由はISの主人公勢と早苗さんの年齢を合わせたため。ええ、ネタバレですけど出しますよ。早苗さん。
- ・ アリスが人形劇をやっていたのは気まぐれ、これこそ運命。
- ・ 今のところ恋愛感情は藍さんだけ、アリスはまだ友達感覚。後々どうなるかは作者の手腕にかかっている。
- ・ コンセプトとしてはISの物語が進む中幻想郷の異変介入もぼちぼちやっていく感じですよ。
- ・ 今後はコメディ九割シリアス一割のつもりです。

## 第八話 ～鋼鉄異変～（前書き）

分割するつもりでしたが一まとめにしました。

独自設定の大爆発です。オリキャラも出ます。

あと駄文注意。後書きにある解説という名の言い訳もご覧ください。

次回、やっと、白騎士、事件だ、よ。

## 第八話　〜鋼鉄異変〜

「トニー！起きて起きて！！」

腹の上を感じる重み、それを感じながら眠りから覚醒する。  
目を開くと橙が馬乗りになっていた。何だ？

「……………あと5分」

まだ眠いので布団を頭に被る。今日の訓練は休みだったはずだ、多  
少寝過ぎても罰は当たらんだろう。

「にゃっ！？お、起きてよ！起きてっばー！！……………もう！！」

ん？何か布団の中が暖かく……………

「って熱ア！？」

ふ、布団様が燃えてる！！

「橙！てめえ何しやがる！！」

「起きないからだよ！まったく……………あ、そうじゃなくて！！」

橙が俺の手を引っ張り走り出す。

「お、おいおい。一体何だっただ？」

「話は後！紫様が連れて来いって！」

紫さんが？

場所は変わって居間。何時もなら藍が朝食を準備しているのだが今日は雰囲気違った。

紫さんが休み無く手を動かして大量のスキマを開いたり閉じたりしており、タチコマが紫さんの隣でスキマの中を見て回っている。

「紫様、トニーを連れて来ました」

「ありがとう橙、すぐに藍の補助に回って」

「はい！」

橙が少し大きめに開かれたスキマに入って行った、紫さんは振り返らずに言葉を続ける。

「トニー、朝早くからごめんなさい。でも非常事態なの。タチコマちゃん、モニター」

「はいはい」とタチコマが近づいて来た。投影パネルを映し出して写真や地図を表示する。

「じゃあ説明するわね。15分前にこの妖怪の山の山頂に謎の黒い穴が出現したの」

「謎の黒い穴？」

「調べてみたけど……一種のワームホールみたいなものだった。出現の原因は不明よ」

「そしてその穴から出てきたのがこれだよ」

画面に表示されたのは見たことの無い戦闘機や虫のような形をした機械が大量に群がっていた。

「なんだこいつら？」

「恐らく……異世界の兵器ね。妖怪の山山頂から幻想郷に広がりにあるわ」

「異変つてやつか。博霊の巫女は？」

異変解決は博霊の巫女が動く筈だ。もう行ってるのか？

「そいつらの量が馬鹿みたいに多くて手こずってるの。人を守るのも仕事だから……他の幻想郷の実力者も自分達の場所で手一杯みたい。数も通常の異変が起こった時の妖精の量とほぼ同じね」

地図に戦闘中の範囲が赤く表示される、妖怪の山はほぼ真っ赤になっている。

「妖怪の山は天狗が抗戦中。持ってるけど、時間の問題よ」

「藍は？」

「彼女には結界の確認に行かせてるわ。橙はその補助」

「それで」と言いながら紫さんがスキマを全て閉じこっちを振り向いた。まさかとは思いが……………

「今のところ動けるのは貴方とタチコマちゃんだけ。トニー、この異変解決してきなさい」

……………泣けるぜ。

- - - - -

東方鋼鉄男

＼The machinery invader＼

・自機選択

「鉄の御曹司」

トニー・スターク

・装備

「タチコマと一緒」

通常弾：拡散型霊撃。低速時前方に集中。

高速：前方に鉄の槍を放ちます。

技「10000mm円柱」

低速：タチコマが自動的に敵を攻撃します。

技「グレネード・フェスティバル」

フルパワーになったら何か起こるかも？

タチコマ給油中……………

……………

1st Stage 油臭い通り道

妖怪の山の麓、俺は山頂を目指して突き進んでいる。

藍との修行のお陰で浮遊することも可能となっていた。俺の後ろではアイアンマンのスーツと同じ飛行制御の方法で四つの足からジェットを噴出しながらタチコマがついて来る。

本来ならタチコマに乗り込んで光学迷彩を使用し、すんなりと山頂へ向かう予定だったが。紫さんに「ある程度機械も破壊して欲しい」とのこと。なので今堂々と進んでいるわけだ。

「しっかしここらへんは油の匂いがプンプンしやがる。どうなってるんだ？」

「うーんどうやら上から流れてるみたいだね。先に原因があるんじゃない？」

前方から小さなスターウォーズのミレニアムファルコン号のような飛行物体が飛んで来る。タチコマが片腕の機関銃を、俺が霊弾を撃ちながら破壊していく。

時折他のより大きな蜘蛛型の機械もいたが、難無く破壊していった。ある程度進み、前方に大きな影が見えた。あれが油の原因か？そしてその近くにオレンジ色の服を着た少女が二人いた。

「ちょっと！アンタのせいで焼き芋出来ちゃったじゃない！！まだ小さかったのに……」

「おまけに紅葉まで燃えてしまったわ。許さないわよ！」

その少女達が怒鳴りつける先は巨大な鉄の蜘蛛。先程のとは比べ物にならないくらい大きい。

鉄の蜘蛛は下に付いている火炎放射機で火を吹こうとした。

「させねえよ」

生成した鉄の槍を放ち噴射口を破壊した。背中に付いている砲門が

こちらに向けられるが少女達が放った弾幕によってそれは阻止されそのまま鉄の蜘蛛は破壊された。

少女の片方、葡萄の飾りが付いた帽子を被った方がこちらに飛んで来る。

「助けはいらなかったみたいだな？」

「一応神様やってるからね、でもありがと」

「神様だったのか。そりやすまなかった」

「そうよ、私は秋穰子。あきみのりこ豊穰の神よ」

「私は姉の秋静葉、あきしずは紅葉の神をやってるわ。よろしくね」

いつの間にかもう片方も来ていた。

「俺はトニー・スターク、一応外来人だ。んでコイツがタチコマ」

「よろしくね」

互いに自己紹介した後周りにいる機械を殲滅。秋姉妹はまだここに残るらしいので俺達は先に進んだ。

1st Stage clear!

タチコマ給油中・・・

・  
- - - - -

2nd Stage 鉄の森

秋姉妹と別れ暗い森に入った。

森の中にはタワー型の機械が多数設置されておりそれからの攻撃を凌ぎながら破壊していく。

「いろんなヤツが出て来るな。逆に面白くなってきたぞ」

「一応記録しているから後で作ってみてもいいんじゃない？」

「そいつは名案だなぁと！」

弾幕を避けながら森を進んでいった。

少し光が射している開けた場所に入った。何もおらず逆に不気味になっている。

「タチコマ、索敵」

「了解！……………！！トニー君、下！！」

聞こえた瞬間ナニカが飛び出し、紙一重で避けれた。

飛び出したのは巨大な鉄の蛇だった。  
蛇は口からレーザーを放ちながら突っ込んで来る。

「うおっ!？」

避けたと思ったら胴体からミサイル出してきやがった!! 少しかすったぞ。

蛇は森の中に入っては攻撃を繰り返してくる。このままじゃ時間がかかるだけだな……………

「タチコマ、出て来たら前方にそのまま砲撃しろ」

「オツケー!」

その場に立ち止まる、静寂が辺りを包む。

・ザザザザ…………… ザアッ!! ……

音が聞こえた方向にタチコマと同時に霊撃を放った。

弾幕は鉄の蛇の口の中へと吸い込まれていき蛇はそのまま爆発した。しかし、蛇の胴体が八つに分裂し空中浮遊して襲い掛かって来る。

「そこまでして来るか! 変態め!!」

飛んで来るレーザーを避けながら長めの鉄の槍を放つ。鉄の槍は次々と貫いて串刺し状態にした。

「あんまりおいしくなさそうだね……………」

「お前は何言ってるんだ？」

まあ、アツサリ終わったな。

2nd Stage clear!

タチコマ給油中・・・

3rd Stage 逆らえぬ流れ

森を出て川沿いに入る。一応タチコマも水中稼働は可能だが空を飛んで進むことにした。

川からトビウオに似た造形を持つ機械が飛び込んで来る。霊撃一発で済むものの数が多いので少しややこしい。というか……

「今までのヤツって地形に合わせてあるよな？」

「あ、そういえばそうだね。森の時はタワー型だったし、今のも魚みたいだったよ」

つまり奴やつさんは地形を把握しているってことか？厄介やくわいだな。

アメンボのようなやつからの攻撃を避けながらそう思った。  
ウナギ型、タコ型といった様々な種類の敵の妨害を受けながら進んでいく。そして遠くに人影が見えた。

片方が白髪の犬耳で剣と盾を持っている。もう一人は黒い羽が生えており、犬耳の片腕をしつかりと掴んでいた。

「文さん！離して下さい！！」

「椀！貴女何勝手に行こうとしてるの！？里の防御と妖怪の避難補助の命が天魔様から下されてるでしょ！！」

「だってにとりが、にとりがまだ見つかってないんです！！もしかしたら逃げ遅れたのかもしれないじゃないですか！！」

「ッ！！………それでも」

「ガガガガガガ！！！！」

二人の間を大量のトビウオ型が通っていく。あ、羽付きの方が離してしまっただな。

「……………ごめんなさい！」

「椀！待ちなさっ！！………くっ！邪魔するなあ！！」

犬耳が行ってしまった。俺の方にも大型の鮭みたいなやつが出て来た。

口から小さい子機を出しながら襲い掛かって来る。羽付きの方も俺に気づいたようだ。

「な！？人間がどうしてここにいるの！！今すぐ立ち去りなさい！」

「八雲の使いで来た！！今はこいつらどうにかするぞ！！」  
「八雲の？」

おー黙った、紫さんのネームバリューって凄いな。

そのまま共闘に入る。羽付きが扇みたいなのを振るい風を起こして敵のバランスを崩し、それを俺とタチコマがどんどん撃ち抜いていく。

「八雲の使いつて言うほどだから中々ねっ！と」

「そいつはどうもっ！」

周りの敵をあらかじめ片付けたら、トビウオ型が集まって巨大な魚の形になった。羽付きは唾然としている

「あんなの弾幕も風も効かないわよ……………」

「いや、集まったなら逆に好都合だ」

「……………何か手があるの？」

「とっておきがな？後ろに下がってる、タチコマも」

「おお！ついにあの必殺技を使うんだね！！」

羽付きとタチコマが後ろに下がるのを確認する。トビウオ（大）も真っすぐこちらを見ていた。そしてトビウオは突進して来る。

俺は拳を突き出した。

「ブツ飛べええ!!!」

拳の先から出たのは直径10メートルの鉄柱。鉄柱は機械の塊をものともせず突き進んでいく。

・ドオオオオオオオン!!!

そして鉄柱は前方の滝に突き刺さった。

振り返るとタチコマは「ロマンだね!!!」とクルクル回って、羽付きは固まっていた。

「ま、こんな感じだな」

「.....や」

「.....や?」

「やり過ぎよっ!!!」

思いつ切り扇で叩かれた。

3rd Stage clear! タチコマ給油中.....

.....

4th Stage 滝からの落としものにご注意を

滝にぶち込んだ鉄柱を分解した後俺は羽付き、射命丸文しめいまるもんを加えて滝に沿って上へ行くことになった。

「しかし鴉天狗か、こんなカワイコちゃんだったとは.....」

「トニー君、幻想郷はそういうトコロなんだよ.....」

「馬鹿言っでないで早くいくわよ!!--」

怒られてしまった。

気持ちを切り替えて進んで行く。

滝の中や横側からオレンジ色の球体で四つのアンテナが生えているのが何体か飛び出して来る。

そして各々違ったレーザーを放ってきた。

「ちよ、何よこいつら!!--」

「いいから避けるのに専念しろ！」

「ほいつちよほいつちよ」

俺と射命丸がギリギリで避けてるのにタチコマは悠々と避けている。なんでだろう、イラッときた。射命丸の顔を見たらどうやら同じ気持ちのようだ。

ある程度経ったら攻撃が止んだのでその隙を狙って破壊した。火力は高くても防御は低いらしい。

攻撃されるのは厄介なので出たらすぐに破壊するようにした。

「まったく、今回の異変は異常ね。貴方八雲の使いなんでしょう？何が起こってるか知ってる？」

飛びながら厄介な質問するなあコイツは。

「これが終わったらちゃんと答えてやるよ」

「え！ほんと！？……………ふっふっふ、これで購読者が増える」

何だろう、ものすごくめんどくさそうな地雷を踏んだ気がする。

敵の出現が止み、しばらく進んでいると犬耳の姿が見えた。水中から飛び出す弾幕を辛うじて避けているようだ。体中ボロボロになっている。

「椛ッ！！」

射命丸のスピードが上がった。だが滝の中から突然尻尾のようなも

のが飛び出して彼女を叩き落とした。

「キヤアツ!？」

タチコマが慌てて射命丸を回収する。  
額が切れて血が流れていた。

「わわわっ!大丈夫?」

「ええ、何とかね……………けどこのままじゃ椀が!」

さて、あの犬耳をどうやって救うかな……………突撃しても即落とされる。相手は滝の中で見えない。ちよつと詰んでないか?

また出て来るオレンジ玉を撃破しながら手札を思い出す。  
俺、霊力はまだある。浮遊制御はまだ不完全、最近飛べるようになったからな?射命丸、風を操れる。あとすごい速い。タチコマ、残弾数はどれもまだある。浮遊制御は安定しているが速さはイマイチ。でも装甲はヒヒイロカネにこの前換えてあるためかなり硬い。

ん?かなり硬い?……………!!アハハア

「……………私にいい考えがある。射命丸!風で俺達を飛ばすことが出来るか?」

「え?一応可能だけど」

「よし、じゃあ俺が合図したら犬耳の方へ飛ばしてくれ!」

「……………大丈夫なの?」

「おう!!」

歯を見せてサムズアップする。射命丸は呆れた顔でため息をついた。

「はぁ……………おかしな人間だとは思ってたけど。まあいいわ、絶対  
椀を助けなさいよ」

「りょくかい!!」

俺はタチコマの下に入り込み押し上げる。

「アレ?トニー君何してんの?」

純粹(笑)なタチコマに対して罪悪感が沸く。だがタチコマよ、せ  
つかく装甲を魔改造したんだ。

「まあ、帰ったらオイルでも飲もうぜ?」

「な、何!?その死亡フラグ全開な言葉!!……………ハッ!?まさか  
!!」

おっと気付かれたか、だがもう遅い!

「射命丸ウ!!打ち上げるお!!」

射命丸が扇を振った瞬間、体全体を激しい風が覆った。そして  
上へぶっ飛んだ。



「でよね！！大切なネタだし！！」

「ネタかよ、俺!!ネタかよ!」一瞬ツンデレと思ったトキメキを返せ!!  
犬耳を抱えて去っていく射命丸を見送りながら激しくそう思った。

「ガガガガッ」

「っと危なっ!滝から出て来る弾幕を避ける。よく見てみると電流が走っている箇所が見えた。一応ダメージを受けてたみたいだ。」

「……やるじゃねえか犬耳、いやモミモミ。大手柄だぜ。」

「よっしゃタチコマ!あそこを集中攻撃だ!」

「……」

「……あれ?タチコマ?」

「……」

「……もしかして、さっきので怒ってらっしやる?」

「……」

「や、やべえ!こんなタチコマはじめてだ!!」

「……あ」

「>?」



あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！  
「おれは タチコマが怒っていると思ったら エイ型兵器がいつのまにか 蜂の巣に なってた」  
な… 何を言っているのか わからねーと思うが おれも 何が起きたのか わからなかった…頭がどうにかなりそうだった… マジ切れたとか過剰火力だとか そんなチャチなもんじゃ断じてねえもつと恐ろしいものの片鱗を 味わったぜ…

4th Stage clear！ タチコマ憤怒中…

-----

5th Stage 河童のプリンセス

あの後タチコマに猛烈に怒られて高級オイル百本でお許しを得た。そして滝を登り切って山頂付近の森、俺はタチコマに乗って低空飛行している。飛ぼうかと思ったら山頂から謎のバリアが広がっていた。解析したところ原子レベルでの干渉を拒絶している防壁で、当たったら即消滅というとてもバリアだった。

道中出て来る敵は殆どが人型、見た目がデビルメイクライ4のビアンコアンジェロみたいな奴らである。所々違うけど。しかも耐久力が超高い、タチコマより劣るけど。

「ムムッ!!」

「どしたタチコマ」

「この先で誰かが追われてるみたい。騎士型も大量に集まってるよ！」

さっきモミモミが言ってた「にとり」って子か？何だってこんな所に……

「よし、んじゃ助けに行くぞ！全力疾走だタチコマ!!」

「飛ばすぜえ〜〜!!」

スピードが上がる。意外と速いな、今度ロケット付けてみるか？

「かつぜつにになる〜〜!!」

タチコマも上機嫌のようだ。さて、能力の準備でも

「へぶらアツ!?!」

な、何だ!?!顔に衝撃が……

「アレ?何で俺地面に座ってんの?」

え?何?キンクリ?タチコマは?

ふと見上げると木の幹が顔型に凹んでいた。

……まさか

「お、置いていかれたあああああ!？」

「ハア、ハア」

走る。奴らに追いつかれないように。けど奴らは追ってくる執拗に、  
疲れることも無く。そして分かった。奴らは人間、妖怪、生き物  
の類じゃないと。

どうしてこんなことになったんだろう？昨日の夜までは権と将棋を  
して、夜遅くまで機械をいじくって、そして寝る。そんな何時もど  
おりの日常だったのに。今日は自分の発明品のテストをしようと思  
ってここに朝早く来たただだったのに。

「!?!」

そんな回想をしていると奴らが近付いて来た、しかも周りを囲まれ  
ている。今まで気配が無かった!

こうなったらこの光学迷彩スーツに頼るしかない。武器も無く妖力  
もなんでか押さえ付けられてるし。まだ実験段階で不安だけど何回  
か成功している、失敗も無い。

そして私は息を殺して起動した。

……目の前に奴らが現れる。生気を感じない、不気味な鎧。何十体もいる、ここで見つかったらおしまいだ。

辺りを見回してたり、歩き回ったりしているが私には気付いて無いようだ。少し安心した。

そして奴らが森の奥へ消えていく。やり過ごせた？そう思った瞬間突然槍が飛んできた。

「え？」

体が動かない。何で？木に固定されてる？右肩が熱い？右の肩を見ると……細長い槍が刺さっていた。

「あ、ああああああ！！！」

いつの間にか目の前に来ている奴らの一体が私に刺さっている槍を引き抜く。光学迷彩も解けてしまった。

傷はあんまりひどくない、けど私はもう立てなかった。体の痛みより心に突き刺さった気分だ。

ぼんやりと見上げる、剣を振り上げられていた。あはは、すごく遅く感じるよ。走馬灯も見れない、少しは感傷に浸りたかったなあ……

……でも。

「しにたく、ないよう」

「ガンツ!!」

「……………え？」

剣が止まっていた。いや、見えない何か(……………)に止められていた。

「まったく、トニー君ほっぽり出して来てみたらとんでも無い修羅場だよ」

ジワジワその場に現れるのは青く塗装されたボディ、そして四つある脚。完全に謎の機体だった。

「こんばんわ〜タチコマですう〜」

奴らが襲い掛かって来る！私は急に持ち上げられて背中に乗せられた。

「捕まって！」

言われた通りに背中(？)にしっかりとしがみつくと、タチコマは――

瞬で奴らの包围をら一気に突破した。だけど奴らは追って来る。

「あゝもう！衝撃で光学迷彩壊れちゃったよ！」

さっきの光学迷彩！？全然気付かなかったよ！

森の中を疾走する。途中浮いたりして障害物を避け続けているが距離がまったく離せない。奴らも羽みたいなのを広げて飛んで追って来てる。

「ね、ねえ！！あいつら倒せないの！？」

ちよつとしたの希望にかけて聞いてみた。

「いやゝさっき調子に乗って弾全部つかっちゃった」

「何やってんの！？」

「ムシャクシャしてやったんだよゝ反省してるよゝ」

ぜ、絶対反省してないよ……………

「お、ちよつと開けたとこ発見」

私の心情お構い無しに進んでいく夕チコマ。出た場所は小川が流れていて紅葉が落ちる、綺麗な場所だった。ここには初めて来た。こんな時に来たくはなかったけど。

中心で立ち止まった私達を囲うように奴らがゆっくりと降りてくる。

「ど、どうするの？」

確実に詰んでいる。どうやって脱出したものか。

「どうしようかな？……！アハハ、どうしてこう演出家なんだか」

タチコマが急に愉快そうに笑った。何が可笑しいんだろう？

急に私に槍を突き刺した奴が突進してくる。速い！？

私達に槍先がに迫ってきた。

「おいおい、女子おんなに手え出すなんざ無粋むすいじゃねえか？」

だけど、それは止められた。一瞬で奴が吹き飛ばされバラバラになる。

上から何かが落ちてきた。

・ガンッ！・

着地時に響く鈍い音。それがより存在感を出す。

「だんだんとお前らの正体、行動パターンも読めてきた。仮説だけ  
ど」

奴らが襲い掛かった。剣、槍の矛先が一点へ向けられる。

「まあそんなことになった理由も解った」

だがものともせずすべて吹き飛ばした。空から光が射し込みそこにいたのは……………

「だが漂流物達、ドリフターズ手前えらは絶対に認めない」

……………鉄の男アイアンマンだつた。

後ろをモニターで見る。タチコマの上に乗ってるのがにとりだな。肩を負傷してる、ちよつと遅れたか。まあ今はコイツらに集中しますかね。

周りを大量の騎士型が囲む。

「タチコマ、補助頼むわ」

《オ〜ライ》

タチコマにリーダー役を任せ騎士型の集団に近づく。一体が剣を振り上げた瞬間、縮地で手の平を胸部に当てリパルサーによる一撃を放った。

リアクターのエネルギーは色々と応用が効く。飛行推進剤、衝撃波、そして無限大の電力等。今回使用しているスーツはマーク5、あの手持ち型のやつだ。このマーク5は従来飛べなかつたがタチコマに備え付けあることを前提に設計したため重量が増える代わりに飛べるようになった。見た目はあまり変わっておらず、足の裏にリパルサーが付いただけになっている。

騎士型が詰め寄って迫って来る。脚部の出力を上げこちらから突っ込んだ。加速された鉄の拳が一気に何体も貫いていく。崩れ落ちる騎士型を一瞥しリパルサーを近くにいた騎士型に撃ちまくる。騎士型は防御する間もなく、どんどん破壊されていった。

ワンサイドゲームが続き、騎士型を全て破壊した。

「タチコマ、周りに反応は？」

《うーんもう無いっ!?!?.....トニー君、大きいの一つ近付いてきてるよ》

成る程、ボスキャラの登場ってわけか。そう思った矢先、影が射した。日が昇っている方を見ると大きな羽と大剣を持つ赤色の騎士型がいた。

騎士型は静かに降りてくる、纏ってる雰囲気は全く違う。

そして一瞬で間合いを詰められた。

「!!」

振るわれる大剣を避ける。頭部にリパルサーを向けるが体を捻って避けられた。

騎士型の猛攻は続く、捻った力を剣に乗せそのまま横薙ぎに移った。しゃがんで回避し回し蹴りを騎士型の足に仕掛ける。騎士型は羽を広げ飛んで回避した。

天と地、それぞれ違う場所から睨み合う。

「意外とやるな……赤いのは三倍強いんですってか？」

《ニュータイプなんじゃない?》

そりゃ勝率が低くなるぞ?

騎士型は軽口に全く答えず低く構えて大剣を腰に据えた。ここで決めるつもりか。

「いいぜ、そういうの嫌いじゃない。俺もまだ用事があるしな?」

風が吹く、一枚の紅葉が飛んできた。そしてヒラヒラと舞い……  
…地面に落ちた。

・ヒュッ………スドン!!……

風を切る音と衝撃音。

- ..... パキン -

頭部装甲に亀裂が入る。大剣が真正面に入っていた。

- メキッ -

だが俺の腕が騎士型の胸部を貫いていた。

タチコマ達がいるところへ降りた。にとりが驚いた顔でこつちを見ている。

「お疲れさま。来るのが遅かったじゃないかトニー君」

「お前にわざわざパーティーのおめかしの時間を貰ったんでね。じつくりと着替えていたのさ」

「けどお姫様はせっかちな御方の手に掛けられそうになったんだよっ」

..... お前があんなやり方で俺にスーツを装着するようにした

くせに。ていうか焦って涙目でウロウロして前に落とされていたス  
ーツケースに気付かなかったなんて言えねえ！！

「あの〜」

「ん？ああ、お前があのだ耳モミモミの言ってたにとりだよな？」

「あ…うん、私の名前は河城にとり。河童だよ」

「そっかそっか。んじゃ河城、傷は痛むか？」

「ちよつと太めの針が刺さったようなものだったからね。一応妖怪  
だしもう塞がったよ。あとにとりでいいよ」

「すげえな妖怪ボディ。」

「さて、このにとりをどうしようか。また山を下りるのも時間がかか  
るし、かといって一人で行かせるのも危ない。」

「…………… タチコマ。にとりをお前の搭乗部に入れるけどいいか？」

「あ〜やっぱり連れて行くんだ……………うん、一応脱出装置が付いて  
るし大丈夫なんじゃない？」

「え？どういこと？」

「にとり、お前一人で山下り出来るのか？」

「あっ！そういことか……………ごめんね？なんかお荷物になっちゃっ  
て」

「別にキニスンナ」と言いながらも近づきにある山頂を見上げた。  
曇った空に浮かぶ不自然な黒い穴。そこに潜む者の正体を薄々感じ  
ながら……………

5th Stage clear! タチコマ給油中……………

……………

Final Stage からくり仕掛けの鎮魂歌<sup>レクイエム</sup>

能力で頭部装甲を修理した後。山頂へと続く道、敵の数も大量に増  
えているものの難無く進むことができた。にとりもタチコマの装甲  
に守られてるようなもので安全だ。

「総集編って感じだな。出て来たやつらがわんさか出て来る」

「やっぱりあの『穴』から出て来るからじゃない？」

《す、すごい！こんな機械初めて見た！！》

「ギャー！！ボクを体の中からいじくるなあ！！」

最終決戦前なのにイマイチ緊張感に欠けるな……………

山頂に近付いてきた。穴の真下で誰かが飛んで戦っている。  
黒い羽に緑の服の女、天狗か？

「おいにとり、あいつ誰だ？」

《ん？ちよつと見せて…………… ああ、あれは天魔様だよ》

天魔？天狗達のトップみたいなものか。さつき射命丸が天魔様の命令がうんぬんかんぬん言ってたし。

「知り合いか？」

《一応、装備の依頼を受けて作ったんだ。ショットガン十丁と大剣一本》

おお、さつき聞いたがさすがエンジニア。俺の部下にしたい。河童だけ。

邪魔なのを破壊しながら天魔の方へ接近する。天魔の背後へ襲い掛かったトビウオ型を破壊し天魔と背中合わせになった。

「やっと来おつたか、トニー・スターク」

「あ？俺のこと知ってんの？」

「ワシの能力でな。涙目になっておつた所も見ておつたぞ」

「ヤメテ!!」

カラカラと笑う天魔。敵に回したくないな、この人。

「まあよい、奴らを一気に殲滅する。手伝え」

「いいですとも!!」

「ではゆくぞ!!」

両腕のリパルサーの出力を変換する。天魔が両袖と羽の裏からショットガンを出す。

「消し飛べ!!」

周りに青白いレーザーと散弾による弾幕が放たれた。

一分後、周りにはもう既に何も残っておらず真上にある黒い穴だけだった。

「ふむ、後はあの穴だけか……一体何なのじゃ？あの穴や見たことのない兵器は」

「紫さん曰く異世界の兵器だと。迷惑したらありゃしない」

「まったく吸血鬼の時の方が楽だぞ……む、何か来るぞ」

黒い穴が歪みはじめ、形を変え球体状になる。穴というより円盤だったのか？

そして球体の表面から様々な巨大兵器が飛び出した。

「……さて、どうする？雨も降り出したぞ」

「……やるしかないっしょ？一応防水性あるし、このスーツ」

離れているタチコマの解析が届く、あの飛び出している兵器の内容だ。何々……弾道ミサイル、レルガン、荷電粒子砲、マイクログミサイル、その他諸々のトンデモ兵器のオンパレードのようだ。

「ほお？やはり人間には見所があるのお」

「さつさと帰って藍のおいしいご飯が食べたいだけだ。朝から何も食ってないんだよ」

「ハッハッハ！そうかそうか……なら終わったらワシが酌をしてやるうか？美味しい料理も出すぞ？」

「マジで？」

・警告！複数の兵器にロックされています・  
モニターの右上に表示が出る。

「大マジじゃ、やる気は出たか？」



「まったくじゃ。作った者は気が狂つとるんじゃなかるつか？」

「……………まあ作ったというか、そうだったというか」

「……………どういことじゃ？」

「終わったら話す」と言いながら前方の敵を見る。兵器が生え過ぎてもう球体が見えなくなってる、もはやハリネズミ状態だ。

「切つても消してもまた生える。どうすりゃいいんだ？」

「ああ、そういえば『核』があつたぞ？」

「……………は？」

「ワシの能力は『見聞する程度の能力』でな？ 奴に一太刀浴びせた時に発見した。おぬしの活躍もこの能力で見たのよ」

「何だよソレ！？ プライベートもへつたくれもありやしねえ！？」

「はあ……………で？ その核は何処に？」

「中心（お約束の場所）じゃ」

「 temple 通りの場所だな。けどアレの核は肉の壁ならぬ兵器の壁に覆われている。攻撃しても再生するどころか増えるからな……………」

「……………再生させないほどの火力、か。」

「おいタチコマ、対象の中身も兵器だらけになってるのか？」

《え？ちよつと待ってね………いや、ただのエネルギーの塊だよ。外殻だけ兵器に覆われているみたいだ》

「じゃあ天魔。その大剣って結構切れる？」

「うむ、河城に特注で作らせたからの。ヒヒイロカネにも傷を付けるそうじゃ」

材料は揃ってるな……危険だけどやるか。

「天魔、俺が剥き出しにするから核を破壊してくれないか？」

「……………できるのか？」

「できるんだよ」

土砂降りの雨の中俺は鉄の仮面の中で不敵に笑った。  
水の滴るいいオトコってな？

鋼鉄のハリネズミに真っ直ぐ向かう。弾幕やレーザーの妨害に遭うが藍が怒った時より全然マシだ。  
そして至近距離に近付いた。

アーク・リアクターのエネルギーを全て胸部に集中、浮遊制御は靈力で行う。

そうしている間に何発も被弾する。スーツがあるがやはり痛い。

右腕の装甲が碎ける、まだか……………

左足の装甲が吹き飛び血が流れる、まだなのか……………

頭部装甲が破壊された瞬間。耳に付いていたイヤホンから聞こえた。  
- チャージ完了、発射可能です -

「発射アアア!!!!!!」

思いのままに叫んだ、胸から先へ白い一本の線が伸び

- ビイイイイイイイイイイイイイイ!!!! -

そのまま極大の青い柱となって敵のみでは無く雨雲ごと貫く。全エネルギーを使い切った後、胸の周りの装甲が剥がれていた。

空いた大穴の中心に灰色のバスケットボール大の球が煤けて浮いている。

それを後ろに控えていた天魔が一瞬で近付き大剣で真っ二つにした。

その様子を見ながら意識が朦朧としている俺は当然霊力で浮くことも出来ず落下する。

だが、何かに足を掴まれ落下が止まった。

「のびーるアーム持ってきてよ良かったよ」

にとりの声が聞こえた、どうやら助けられたようだ。

「締まらねえな……………」

そう呟きながら意識を手放した。

Final Stage clear! タチコマ給油中……………

## Epilogue

「痛てててててて!」

「ええい、じっとしてないか!」

「藍!お前もうちっと優しくしろよ!」こちとら怪我人だぞ!」

「男が情けない……………ホラッ!」

・ギョッ!・

「アッ……………!」

異変から一週間が経ち、騒ぎも収まりつつある。

被害は妖怪の山が一番大きく、山頂部が更地になってしまったらしい。あと滝の裏に謎の大穴が空いてるそうだが俺は知らない、絶対に知らない。

他の地域はほとんど被害無し。死傷者もゼロだった。ヒイロカネを使用していなかったスーツは大破。俺ごとボロボロになってた。

破壊した機械の残骸は同時に全て消え去った。あの核の破壊が原因だろうか？

まあそんなワケで安静にしていた俺だが……

「何で宴会行かなきゃなんねんだよ……………」

「お前が解決したからに決まってるだろ」

「天魔もだけどな」

「お前もだ」

「……………」

そう、今日は博霊神社で宴会を開くらしい。そして俺が主役だとのこと。お酒をわんさか飲まされるそうだ、俺未成年なのに。

「まったく……………体をここまでボロボロにして」

「生きてりゃ万々歳だろ」

俺はアレを撃破した後二日間眠っていた。体に直接リアクターを埋め込んでないから汚染の心配は無かったが、銃創やら切創が沢山あった。今もこうやって藍が消毒と包帯替えをしてくれる。紫さんが「永遠亭」という幻想郷の病院に連れていこうとしたそうだが藍が私が全部やると言ったらしい。

「トニー、そろそろ行くわよ。もう向ここの準備は終わったわ」

「あいあい、てか紫さん今日は普通に歩いて来ましたね。逆にビックリだわ」

「私もそんな気分のあるのよ……さ、早く」

「トニー、大丈夫か？痛くないか？立って歩けるか？」

「だああああ！！お前はお母さんか！？」

そして舞台は博霊神社へと移る……………

宴会の会場に着いた時。もう既に酒盛りが行われていた。

「あら、もう始まってみたいね。貴方が行くのが遅いからよ」

「へーへーすんませんでした」

「ハハハ……酒を飲みたいという名目で集まっているのも多いからな」

「……………毎回そうなのか？」

「そんなものだ」

夕チコマが酒やつまみを運んでる。いないと思ってたらこんなトコにいたんだな。

「紫じゃない。来るのが遅かったわね」

赤い脇出し巫女服を着た長髪の女性が近付いて来た。

「れいか靈華、始めるのが早いと思うんだけど」

「萃香が周りの奴に飲ませたのよ。そのまま芋づる式でどんどんと……………」

「分かったわ、何時も通りね」

「そ、何時も通り。……………貴方がトニー？今回は大手柄だったじゃない」

「紫さんに無理矢理行かされたんだよ……………アンタが博霊の巫女か？」

「私は博霊靈華、靈華でいいわ。まあ紫の勝手さは根っからだから」

「何よ、みんなみんなひどいわね」

その胡散臭い笑いが一因しているのに気づいてるのだろうか？気づいてやってるんだろっけど。

大騒ぎしている参加者の輪に入る気も起きずに神社の隣にある住居の縁側で飲むことになった。藍は霊華と一緒に宴会の料理を作りに行った。

酒は初めてだったが紫さんに入れてもらってチビチビと飲み始めた。

「今回はお疲れ様。いきなり貴方に任せてすまなかつたわ」

「まあ局所的ならまだしも全体に広がった侵略だったからな？仕方ないっすよ」

「結界にはまったく影響無し、やっぱり妖怪の山の上から突然出て来たみたい」

突然出て来たか。やっぱり俺の予想が当たりそうだな。

「何じゃ、ここにおったのか」

「天魔と射命丸じゃん、来てたのか？」

「約束しておったじゃろう？ほれ」

「あと取材も兼ねて来ました！」

射命丸が籠に入った枝豆を、天魔が大きな徳利を見せる。  
ああ、何か死亡フラグ的な約束してたな。

枝豆を食べながら酒を飲み始め、文（名前で呼んでくれと言われた）の取材を受けていた。紫さんと天魔も何か雑談している。

「へえ〜じゃあとニーさんは自由に幻想郷と外を行き来出来ると？」

「まあ此処の鳥居限定だけだな？」

文の口調が変わっているがどちらも素らしい、天狗としての面子があるそうだ。

「じゃあ気になる女性は!？」

「何聞いてんだ!?! 今回の異変じゃ無かったのかよ!?!」

「いや〜それだけじゃ面白みに欠けるじゃないですか。貴方のことを赤裸々と書こうかと……………」

「それ取材を受けてる人の前で堂々と言うことじゃ無いよね?」

そんな感じで取材は進んだ。嫌な予感がする。

文が別の所へ行きボーツと月夜を見上げると天魔に肩を組まれた。

「そんな顔して何を考えておる？やはりあ奴らの正体のことか？」

ああ、なんかそんなのもあったな。だが俺は今胸が腕に当たってるとか今夜だったんだとかアホなこと考えてたよ。

「奴らの正体？トニーは知ってるの？」

「あり？紫さんは分かってるんじゃないですか？」

「無理だったのよ。あの『穴』も突然変化するし境界を操ってどの世界の兵器か調べても結局わからなかったわ。月の兵器でも無いみたいだし」

月とかとんでもない場所が飛び出したがまあいい。

俺は枝豆を一つ食べた。

「恐らく……棄てられたものだったんすよ」

「棄てられた？……ああ、なるほどそういうことね」

「な、何じゃ？勝手に納得せんでワシにも説明してくれ」

紫さんはわかったみたいだな。

「紫さん、説明」

「そうね……棄てられたものが妖怪化することってあるわよね？案件は様々だけど、今回は『存在意義』の問題よ」

「存在意義？」

「そう、存在意義。……ねえ、武器は基本的に何のためにあるの？」

「む、それは戦うためじゃろう」

「その通り、でも使われずに棄てられたらさぞ無念でしょうね？憑神のパターンだけど」

「無念？意志を持つのか？」

「まあ刀を例としてみると良くて主の補助をする霊刀、悪くて人の生き血を求めるのを促す妖刀になるわ」

「では今回は悪い方の意志を持った、と？」

「その通り。元の世界では作られてもまったく使われずに廃棄されたのかしら……」

「そしてあの量だ、その生まれる意志の大きさもハンパない」

「それで妖怪化したと？ではなぜ異世界から来たのじゃ？」

「来たんじゃ無い、ありや漂流したんだ。どれも表面に傷が付いていた。自分の世界の生物根絶やしにしたんだらうな」

それこそ映画「ターミネーター」の未来の世界だ。まあレジスタンスも発生せずに一方的だったんだらうな。平和過ぎて力も無かったかもしれない。

「そして誰にも知られない幻想となってここの結界に引き寄せられ

たつてこと。世界を越えてね」

でもよく考えたら相当な寂しいがり屋ってことだ。

「フム………ではあのような侵略がなければ受け入れてたのか？ 八雲よ」

「そうね………でもそれは叶わなかったわ。それに形あるものはいずれ崩れるわ、必ずね。それまでに大切に使えばいいのよ。でも疎かにしたら………」

スキマから三色ボールペンを取り出す。

「これでさえとんでもない化け物になるかもしれないわよ？」

「ハハハ！！それは恐ろしい！部下も大切に扱わんと大変なことになる！そうじゃ！！！」

「ハハツ！！そうかもなあ！夕チコマも怒ったら恐かったし！」

「フフ……違いはないわね。藍も怒ったら相当よ？」

酒が回ったのか大声で笑った。

T  
r  
u  
e  
  
E  
n  
d  
i  
n  
g  
  
「モノは大切に扱いましょう」

## 第八話 〈鋼鉄異変〉（後書き）

・解説（必ずって程じゃないけど読んで欲しいかも）

・オリキャラについて

えー、オリキャラはmugenのイメージ使ってます。

天魔は天魔様。霊華は樂園の撲殺巫女（正式名称忘れた）です。

・敵の解説

ラスボスはD・gray-manのAKUMAレベル2になる前の球体みたいな感じです。顔は付いてないけど大きさは東京ドームの半分ぐらいでしょうか、トニーの最後のかめはめ波も相当な大きさになるってことですな。

4ステージのオレンジ色の球体はR-Typeのアレです。もしかしたら幻想郷はバイド汚染したのかもしれない。書かないけど。他は勝手なイメージです。メタルスラッグやグラディウスの敵キャラを基本にしています。

・なぜ消えたか？

核を破壊してなぜ全ての敵が消えたか、というと核が幻想郷に侵入する際の基点だからです。

ラスボスが妖怪化 幻想郷入り ラスボスが無理矢理自分の世界の兵器達を呼び寄せる。

つまり妖怪なのはあの黒い穴だけということです。核を真つ二つにされて兵器達は元の世界へ強制送還されました。

・天魔呼び捨て

ノリです。天魔も気に入ってそのままスルーしています。本来なら厳しい人ですが気に入った人には甘いです。天狗社会は他の種族に

は排他的ですが天魔はそれ程でもありません。天狗社会は幹部の大天狗辺りが頭の固い人物が多い設定です。

・八雲家は何をしていたか

紫さんはスキマを開きまくって状況をリアルタイムで確認、そして解析。藍さんは結界の確認と紫さんの指示に従っての行動。橙は補助。

・博霊の巫女

まだ先代がやってる感じですが。霊華も後継者（霊夢）をもつ既に見つけており。すぐに継がせるつもりです。そしてこの異変を最後にしよう。

第九話 喜劇のはじまり（前書き）

一ヶ月も待たせてこの出来です。焼き土下座でも許されないかも  
れない……

前編みたいなのです、戦闘は次回。あとがきに補足あり。

相変わらずの駄文注意。それでもよろしければどうぞ。

## 第九話　く喜劇のはじまりく

鋼鉄異変。

幻想郷の妖怪の山上空にて謎の「穴」が発生。そして穴から機械の兵器が出現し幻想郷全体を襲った事件である。

博麗の巫女、妖怪の賢者等様々な有力者達が解決に当たったが戦え無い者の守護や避難、原因究明のために大元である「穴」に向かう者は少なかった。

そこへ天狗社会のトップである天魔が急行。兵器達の妨害をかい潜り「穴」へ到達した。

「穴」は破壊され広がっていた兵器も消滅。各々の尽力もあつたため死傷者は奇跡的にゼロであつた。

そして一週間後。博麗神社にて大宴会が開かれ締めくくられた。

一般的には天魔が解決したと広まっているこの異変。実は知られていない功労者が存在している。その人物も「穴」へ到着し天魔と共闘したのである。

なぜ知られないのか？それは彼の特異点が起因する。

彼は所謂「外来人」という外の存在であつた。天狗の上層部では面子を大事にする。天魔が異変を解決したとなれば大きなアピールとなるが、この外来人の存在が如何せん邪魔であつた。

暗殺という物騒な意見も出たが彼は幻想郷の最高権力者である八雲の客人、あまり迂闊なことは出来ない。

そこで天狗達が発行している新聞で天魔が解決したことを広告。彼の存在も薄めることにした。

一部猛反対したグループもあったが時既に遅し。幻想郷でも彼のことを知る者は少ない。祝勝会である宴会に参加していた有力者達のみが知るだけであった。

尤も、彼本人は気にしていることも無く稗田家の記録にもしっかりと残っているために問題無いのだが。

そして彼は幻想郷に再び訪れることを誓い、外の世界へ帰った。

一年後、カリフォルニア州沿岸。

かのシュウワちゃんが知事を務めたこの地にて、俺は何をしているかというところ………

「回復切れたわ、誰か持って無いん？」

「あら、回復弾撃ちましようか？」

「畏仕掛けたよ」

「あと一死したら終わりだぞ？」

モンハンやってました。メンバーは上から俺、紫さん、タチコマ、ローディの四人。クエストはアグナコトルの上位で終盤にさし掛かっている。

此処は俺の家、まあ本社とはかなり離れているが仕事が無いので問題無い。

そこ、俺のことニートと思ったっしょ？イワンが全部持っていくんだよ……………ワーカホリックめ！

何度も手伝うと言ったが親父含む知り合い全員曰く俺は秘密兵器とのこと、いざという時には呼ぶらしい。そう言われたら俺も聞き入れるしか無かった。

だから暇、カーナリー暇なのである。

そういうわけでちよくちよくスキマ使って遊びに来る紫さん、たま遊びに来たローディ、何時も通りのタチコマを交えてモンスタ―ハンターポータブル3rdに勤しんでるのだ。ちなみに全員自前である。

「っしやあ！！クエストクリアーっ」と

「トニー、貴方死にすぎよ。報酬が減っちゃったじゃない」

「んあゝ悪い、俺のところばっかり来てたからな……………」

「そういえばそうだったな？」

そうなんだよローディ、まさか紫さんが境界操ってたりとか……  
無いよな？流石にゲームだし。

「あらあら、それはとても『不運』だったわね」

はいダウト！やってみましたよこの人！！

「昼餉が出来上がった。食事にしよう」

紫さんと一緒に来ていた藍がお盆に食事を乗せて持って来た。

もちろん尻尾と耳は引っ込めてある、黒のスーツでぱつと見エプロン付けたキャリアウーマンみたいだ。

ちなみに紫さんは紫色のタートルネックで長袖のTシャツと白のミニスカートを着ている。ボディラインがハッキリと出ていてムフフな格好………

「トニー、紅茶は要るか？」

「ハイ！すみませんでした！！」

さて！飯食おうかね！！紅茶怖い紅茶怖い……いや、饅頭怖いな意味じゃなくてマジで。

そして食事開始。タチコマはオイル飲みながらPSPやってる。献立は白ご飯、みそ汁、天ぷらの盛り合わせ等の天ぷら定食みたいなものである。

「テンプラとミソスープか……………」

「あり？ローディって和食苦手？」

「いや、ここまでジャポニズムを嗜むようになるとは思わなかったからな？初めはジャンプコミックだったが」

「でも美味いだろ？」

「まあな」

前世が日本人だからな……………勿論洋食も好きだぞ？てかえび天マジウめえ。

「藍の料理ってホント美味しいな？」

「これくらい普通だ。どうということはない」

「フフフ、藍ったら褒められて顔真っ赤ね」

「ゆ、紫様！」

何慌ててるんだ？そう思いながらみそ汁をズズズと吸っていたら隣のローディがニヤニヤとこっちを見ていた。

「トニーにはこういうのには全く縁が無いと思っていたが……意  
外だな？」

「あら、ローズ君もわかる？」

「この様子は、な」

「ふふふ二人とも！何を言っておられるのですか！？」

さらに慌てる藍。あー成る程な……

「顔真っ赤っかにしちゃって。やっぱり褒められるの慣れて無いん  
だな」

俺がこの発言をした瞬間、世界が凍った。紫さんの顔は引き攣り、  
ローディは「ざわ……ざわ……」といった効果音が似合いそうな顔  
をしている。

「あり？皆どうした？そんな顔」

直後、俺の視界が真っ暗になった。午後ティーの味覚をほんのり残  
して……

……「ちこそつまでした。

「ああ、おかわりはまだあるぞ？」

……いただきます。

「そうだ、味わって飲むんだ」

一体何本の午後の紅茶（１リットル）を飲んだらう。  
時には紅茶パイ、時には紅茶ゼリーと幾重にも並ぶ紅茶分を摂取した。

時間の感覚も鈍っているもう一分と一時間の違いもわからない。

そしてまた一本飲み切る。もう周りに散乱するのは空のペットボトルの山、山、山。

もう終わりですか？

藍が立ち上がり隣の部屋への襖を開いた。

「何を言っている、まだこれからだらう？」

………目の前には、午後の紅茶（１リットル）の壁がそびえていた。

「はっあッ!?!」

目が覚めたらソファアの上、どっやら寝ていたようだ。

……………アレ?何で寝てたっけ?

思い出そうとしても中々思い出せない。体が拒否しているような…

……………

「トニー、目が覚めたの?」

声をしたを見てみると紫さんがタチコマとPSPで遊んでいた。

「他の皆は?」

「もう皆帰ったわ。藍は橙の晩御飯、ローズ君は学校ですって。それにお外は真っ暗よ?」

窓の外を見てみると海の灯台の明かりだけが見えていた。どんだけ寝てたんだ、俺。

「俺って何時寝たっけ?」

「ゲームの途中で寝落ちしたのよ。ローズ君がソファアまで運んだわ」

「寝落ちか、最近寝不足だったかな」

そうぼやきながら冷蔵庫からオレンジジュースを出してがぶ飲みした。ポトル片手にソファアに座り正面に広がる海の景色を見る。月が上がって海面に映っていた。

それを眺めていると紫さんが一升瓶をスキマから取り出しながら隣に座る。

「日本酒っすか？」

「芋焼酎よ。飲む？」

「寝起きに酒は遠慮しますよ」

「あら、残念」

静寂、波の音とタチコマがやってるゲーム音のみが聞こえる。

「あの異変からもう一年ね……………最近どうかしら？」

「まあ、何時も通り平和です。タチコマとバカやって、イワンに叱られて、それでローディ弄りのルーチンワークっす。

あ、でも親父の出張が多いかな？」

「お父様……………ハワードさんの？」

「十中八九、愛人でしょうね」

「愛人って……随分と平静ね？」

「別に男なんだからいいっしょ？親父が惚れるんだから悪い人じゃ無かるうし」

それに俺の母親は二歳の頃に死んでいる。心臓発作、ホントに急だった。名前もうつすら、マリアだったっけな？

だから遠慮せずに恋だの好きに堂々とやってくればいい。母、としては微妙だが受け入れることは出来るのだから。

「……貴方ってホント読めないわね。おちゃらけたと思ったら今みたいに達観してるし」

「お月様見てちよつとセンチな気分なんスよ……っつか境界で覗けるんじゃないですか？」

「こつというのは考えるのが面白いのよ。あの鴉天狗の時もそういう気分だったのかしら？」

鴉天狗……ああ、文の事か。

「新聞が出回った時に随分とご立腹だったわね……」

「女の子に囲まれるのは役得でしたけどあんな剣幕だとねえ……」

ホントにあれは焦った。博麗神社に挨拶に行った時に急に来たかと思えば襟首掴まれて「何で貴方の事が載ってないのか？」と、後に来た椋、にとりからも同様の詰問で完全包囲。苦笑しながら返答していた。

ここまででは良かったのだがスキマから紫さんと一緒に来ていた藍がその光景を見た瞬間、何をトチ狂ったのか俺の頭に回転蹴り。散々な出来事だった。

「思い出す度に首がゾワつとする……………」

「フッフ…………でも本当に良かったの？英雄ヒーローになれたかもしれないに」

「俺は主人公つて柄じゃないっスよ。んあゝあれだ、死神博士みたいなポジション」

「あら それなら仮面ライダー（主人公）は作れるんじゃない？」

「見つければね……………」

まあショックになる気は無いんだが。

ジャーヴィス  
JARVIS。トニー・スタークが制作した超高性能人工知能である。

初期はただインターネットによる自由学習のみだったが情報の積み

重ね、学習、思考の繰り返しより「個性」を獲得する。

そして独自のネットワークシステムを形成、人間の脳細胞の如く常に進化し続ける存在となった。その上己を機械として受け入れ、父親的存在であるトニー・スタークに忠誠を誓う。

さて、ここまででは聞こえが良いのだが………そんな彼女（彼？）がトニーが紫と話をしている最中真下、地下に存在するサーバールーム内の電脳空間で何をしているのかというと………

「む、腹筋スレか。電脳空間とはいえやらねばな………」

2ちゃんねるに勤しんでいた。

ジャーヴィス。その高性能さを時折無駄な方向へ利用する残念なAIである。

「ふう、疲れないとはいえ三千回は中々精神に来るわ」

IDの数字×10が回数だったためにかなりの回数を要した。 pi  
pboy300とういうファールアウトなIDだったからな………

父様に作られて早数年、体を持たない私はこの電脳空間にて己の体を作っている。モデルはブラックラグーンのパラライカ、火傷無しバージョンだ。

この空間も特殊だ。情報で形成された世界、様々なデータの川がある。父様は「攻殻機動隊」というのを参考に作った世界らしい。

「暇だな、父様の設計図でも覗きましようか」

手を振り手元に情報の結晶を引き寄せる。幾つか指で突いて周りに展開した。

父様の設計図はどれも真新しく退屈させない。どれも五十年先を進んでると言っても過言ではないものばかりね。

「ツイン・リアクターシステム、ヒイロカネ弾頭、量子化重ね…… スペルカードシステム？」

スペルカード、確か幻想郷での決闘システムだった筈。父様とタチコマ姉様も数枚持っているらしいけど。

「何々…… 『外の世界で能力行使する際

」

・スターク・インダストリーズ中枢サーバーにて侵入を確認・

む、何だこんな時に。無粋な輩め。

・ミサイル制御システムに侵入、身代わり防壁を展開します。ハッ  
カーの速度から30分で突破される模様・

ふむ、中々の腕前ね。せつかくだから「あの子」を呼びましょうか。上にいる姉様はゲームにお熱のようだし。

「コード『ライ麦畑』、起きなさい『笑い男』」

目の前に青い彼のロゴマークが出現する。

《呼んだかい？ジャーヴィス姉さん》

「貴方今『何処に』潜んでるの？」

《本社の清掃用ウチコマの中だけ》

「今すぐ本社のネットワークにアクセスしなさい」

・本社ネットワークにてウチコマW・07のログインを確認・

早いわね、流石ウィザード級。

《……………へえ、面白いのが来てるね。トロイの木馬と似ているけど放出するのはミサイルとは》

「お仕置きはこつちがやっておくから貴方はとりあえず相手を弾いておきなさい」

《お仕置きって…………絶対姉さん楽しむつもりでしょ。父さんは？》

「上で美人なお客様と飲んでる。邪魔するのモアレでしょ？明日報告しておくわ」

《わかった。障壁は何枚必要?》

そうね、力任せに沢山作るのもちよっとナンセンスだし……

「侵入させたり弾いたりするくらいに常に微調整でお願い。私が見つけたら完全閉鎖でよし」

《了解》

さて、逆探しますか。

全衛星にアクセス……完了。データ発信経路を確認、地球……ユーラシア大陸……日本列島……ここまでにしときましようか、絞るとばれるかもしれないし。

PCを除く端末の電波より探知……見つけた。

「発見したわ。完全閉鎖でダミーオールシャットダウンだけ残しときなさい」

《了解、これからどうするの?》

「今は放置。ある程度時期が経ったらネズミさんに私のお宝ムービーでも送るから」

《……内容は?》

「ガチムチパンツレスリングメドレー」

《うわぁ……》

あー楽しみ、ニコニコ動画で材料探していきましょうか。

- - -

あの後紫さんに無理矢理お酒飲まされてそのまま就寝。トニー・ス  
タークとしては初の二日酔い状態で最悪の目覚めだった。まだ未成  
年だぞ……………

「あゝ気持ち悪い」

「あ、トニー君おはよう水飲む？」

「あんがと」

タチコマからコップを受け取りちよつと落ち着いた、だんだんと覚  
めていくのがわかる。

それにしても早くないか？まあ幻想郷ではグビグビ飲んだしな、慣  
れか。

《父様、姉様おはようございます》

天井に付いてるスピーカーからバラライカなジャーヴィスの声が響  
く。実際この家自体がジャーヴィスみたいなものだ。

「おはようジャーちゃん」

「おはようさんジャーヴィス」

冷蔵庫からパンを二枚出出してトースターに入れた。

《報告があります。解決しましたが確認しますか？》

「一応聞いとく」

フライパンで卵とベーコンを焼きながら答える。

《昨晚、本社の中枢サーバーが侵入。ミサイル制御システムが狙われ私と『笑い男』で対応、完全に除去しました》

フライパンを動かすのを止める。

Laughing Man、通称笑い男。俺が制作した人工知能第三弾。学習方法はデータ化した書籍をひたすら読み込ませた。

そしてあらゆる場所に「潜む」ことが出来るAIでもある。ウチコマ、パソコン、インターネットに繋がってるなら何でもだ。以前自宅の改造した1TBPS3に侵入して勝手に操作してたのにはビビった。放浪癖があつて困る。

だがそれが笑い男の本質ではない。笑い男の特化させた能力はハッキング技術の高さである。潜伏能力もその高度なハッキングからの副産物でもある。

「……………へえ、そこまでするなんて。ハッカーも相当な腕前だったんだな？」

《はい、人間の範囲では》

ま、だろうな。俺の知識をフルに使ったAIだ。そんな簡単に負けたら落ち込む。

- チーン -

トースターから焼けたパンを取り出してその上に目玉焼きとベーコンを乗せる。

開けっ放しの冷蔵庫から牛乳と特製オイルを出して牛乳をコップに注ぎ。朝食の配膳を済ませた。

「まあ、とりあえずいただきます」

「いただきます」

テーブルに置いたオイルをタチコマが給油口に注す。

ムシャコラしながら報告を振り返る。疑問に思うところを幾つか見つけた。

「テロリストなの？」

《いいえ、位置が日本だったので一応一般人かと》

「それっぽい電話記録、空港記録は？」

《全くありません》

食事を終え、牛乳を喉に通す。

……さて、なんでわざわざミサイルなんて狙ったんだろうか？  
サイコ（狂った奴）でも無い限り戦争なんて起こしても面倒なだけ  
なんだが……別の目的か？

日本、日本か……

「……ジャーヴィス、日本で最近変わった事件、出来事何でも良い。全部洗い出してくれ」

《少々時間がかかりますがよろしいでしょうか？》

「構わん。

タチコマ。笑い男と一緒にアメリカ中のミサイル基地を調査、異常  
があつたら即修正しろ。なるべく早くな？」

「了解！」

さて、俺も動きますかね？

投影パネルを立ち上げて本社の関わった事件、案件、リストラされた人物を検索する。

もしかしたらこれがアイアンマン3の始まりかもしれない。

そう思うと少し冷や汗が走る。

「ジェイコブ博士以外で恨み買ってるヤツもいないな……………」

リストラは無し。スターク社の職員は厳正な試験通ってるからな、ほとんどが定年退職だ。

事件も実験事故も含めて無い。親父が作った初期リアクターは出力こそ低かったものの安定していたようだ。

案件は……………部門ごとに別れてるな。

データ上はクレーム電話の記録、普通のプレゼンぐらいしかない。

「もうちょっと前はどうか？」

俺が生まれる前、二十世紀に遡る。ほとんどが古い紙をスキャンした画像、目が疲れる……………」

資料は戦争、開発関係が多い。ベトナム戦争、宇宙ロケット、コンドル、暗殺された著名人…………… 国家レベルばかりだな。

目を引いたのは第二次世界大戦、全世界様々な思惑が絡まった戦争だ。

スターク一族が関わった部分に目を通す。兵器開発の裏方で活躍しているようだ。同僚の名前を検索するがほとんど死亡。

……………今回は自分達とは関係無い？ 標的は世界ってか？

他の国の資料、画像を一気に表示する。

「ドイツの生物実験、チェルノブイリ関連の新聞、フランケンシュ

タイムのゴシップ記事。どれも笑って流せないな……………」

パラパラと画像を流していく。そして最後の画像を映し出す。

それは大戦中の日本軍の報告書のようなもので大部分が焼焼失していた。

しかし、筆でしっかりと書かれている箇所があった。

「亡国機業？」  
（原）亡国機業

企業じゃなくて機業？

確か機業というのは織物を織る事業だった筈。それに亡国、織物屋さんにしては少々物騒だ。何かの組織か？

本社サーバーやグーグル先生にアクセスして亡国機業について検索する。

ヒット数はゼロ、全く出なかった。

やはり秘密結社か。

《父様、ご依頼の資料が出来ました》

つと、この事は後で親父に聞くとして。こっちに目を通すか。

《大きな事件も無く、政治にも大きな変化は見られません》

「ハッカー個人の特定は？」

《アドレスは特定しましたが住所、氏名等は………特定は可能ですが、恐らく相手に感づかれるため自重しました》

「妥当だな。じゃあ技術者のリストアップ」

《かなり多いのでこちらで絞り込みました》

顔写真と個人情報が表示される。絞り込んだと言っても軽く百人は越えていた。

「………ハア、ここまでとは。腕前から予想できるヤツは？」

《いません》

「は？」

《ハッカーの腕前から考えられる人物はこの中に存在しません》

つてことは………

「フリーのやつかよ………」

《はい。速度、技術から考えて『天才』の部類に入るかと》

厄介極まりない。突破される確率は低いが、こんな奴にそう何度も侵入されれば精神がたまったもんじゃない。

「警告のメール送っても余計跳ねっ返りそうだな。とりあえず放置

で

《かしまりました。こちらで対処します》

ん？こちらで？……………まあいいや、他のも確認するか。

国の工事記録、大手企業の予算案、国会の人事と読み流す……………  
そして目に留まった資料があった。

「宇宙空間での活動を目的としたマルチフォーム・スーツ？」

アイアンマンスーツも宇宙仕様を何個か作ってたな？材料は能力フル活用で。

《一月程前に個人で発表されたものです。日本での評価はあまり芳しくない様です》

「ん、資料全部画面に出して」

表示されたデータを見る。

……………

「……………ジャーヴィス、これは」

《普通に考えれば不可能でしょう。しかしお父様、貴方ならば可能です》

漫画、アニメ、書籍様々な情報を現実<sup>リアル</sup>で使えるようにフォーマットされてぶち込まれた俺なら可能だ。

しかも所々のデジャヴ感、俺はコレを見たことがある……………

・・)。

何時だ、何時見た？自分に入れられた情報じゃ無い。幻想郷？違う。親父が構想した設計図？違う。何処かで……………

『タチコちゃんすごい!!』

……………思い出した、アイツだ。

「ジャーヴィス、開発者の名前は？」

《篠ノ乃束です》

タバネ、束。まさかあの時のスタンガンロリ巨乳が……………

《トニー君!!大変大変!!》

地下サーバーで別行動していたタチコマから連絡が入る。

「どっつした？」

《ボクと笑い君が見回った所以外一斉にハッキングされているみたい!》

《父さん、各所に潜伏させたプログラムをまとめて指揮しているよ。うだ。数が多過ぎる、対処が追い付かないよ》

「は？追い付かない？」

《うん、どつやら世界中のミサイル基地がハッキングされているみたいだ》

..... は？世界中？

《もう発射準備が整っている。目標は日本のようだね》

「.....」

《トニー君？》

《父様？》

《父さん？》

ナンテコツタ、こりゃー大事ってレベルじゃねーぞ。しかも俺の予想が正しければ……………

「……………ジャーヴィス、今チューニング無しで使用できるスーツは？」

《一昨日開発したのが一つ。まだ塗装が済んでませんが》

完全装甲特化のアレか。まあ四の五の言ってる場合じゃねえな。

「じゃあそれで出勤するぞ。時間が惜しい」

《太平洋を横断なされるつもりですか？》

「いや、コイツを使う」

引き出しから紫色のリボンが付いた黄金の鍵を出す。

「境界の鍵」、異変を解決した時に紫さんからご褒美に貰ったやつだ。

どんな扉でも行き先を思い浮かべながらこの鍵で叩くと、そこに最寄りの扉へと繋がるといった優れたものでもある。

使い方次第では「キヤーノビタサンノエッチー」みたいなことも可能だ。

「んじゃ軽くブリーフィング。現状は見ての通りすごいピンチ、恐らくウン千ものミサイルが飛んでくる。軌道から予測して一カ所に集中しているのが救いだ。作戦は俺が打ち落とす、そんだけ。ジャーヴィスは衛星から随時報告、オペレーションを頼む」

《かしこまりました》

「笑い男は本社関連のサーバーの監視。終わったらレポートにしっかりまとめてくれ」

《わかった》

「タチコマはスーツと共有化、状態の安定化を頼む」

《りょーかい!》

んじゃま、いっちょお仕事しますかね？

ピリリリリリリ

「はい、もしもし」

《おいイワン! ミサイルが…!》

「あーわかってる。社長室にいる、スピーカーにするぞ」

《社長室? ってことは》

「やあローズ君、久しぶりだ」

《ハワードさん!?!》

「ちょうど今君が言ってる事が議題でね? ステインは緊急で株主総会を開いてるよ」

「トニーの所へ遊びに行ってたんじゃないのか?」

《帰ってきてテレビをつけたらコレだ。本社は大丈夫なのか?》

「ああ、何も無かった。トニーが手を回してたんだろ」

「ま、私の息子なら当然だな」

《親バカしてる場合ですか……………対策はどのように?》

「何もしない」

「動く必要が無いさ」

《……………は?》

「ローディ、あのバカ(トニー)がウチのサーバー守っただけで終わると思うか?」

「なんだかんだ言ってアイツは中途半端を嫌うからな……………そっぴうことだよローズ君」

《……………ああ、成る程。アイツなら》

着席。

「……………ん！」

「どうしたの？ 霊華姉さん」

「はい、集中力切ったからあと一時間。そんなんじゃ博麗名乗れな  
いわよ？」

「ゲエツ！？ 横暴よ横暴！！」

「まったく、魅魔んところの弟子を見習いなさい。自分から進んで  
やってるらしいじゃない？」

「他所は他所、家は家」

「……………一時間追加」

「！？」

「ちよっと母屋の方に行ってくるからサボらないでね、勘でわかる  
んだから」

「はい……………」

「それで？何で貴女は縁側で私の大切な玉露を飲んでいるのかしら？紫……………」

「あら、そこに玉露があつたからよ？」

「山があるから登るみたいに言つてんじゃないわよ……………」

「菓子折りあげるからそんなに怒らないで頂戴」

「言つたわね、絶対持つて来なさいよ？」

…………… まあそれよりも、外で何か起こるみたいね。異変？」

「流石は歴代最強の勘。外の変化まで感じるなんて…………… まだ巫女を辞めなくてもいいんじゃない？」

「あの子は私以上に伸びるの、勘でわかるわ。」

…………… それで？外で何が起きるの？」

「茶番よ」

「茶番？」

「ええ、とつてもつまらない茶番。三流もいいところだわ」

「そういう割には楽しそうじゃない」

「あら わかる?」

「外だからトニーが何かするんでしょ?わかるわよ」

「じゃあ見せてあげるからかわいいお弟子さんも呼んできなさいな?今日は八雲シネマ開場よ」

「はいはい」

「……………さてと。鴉、犬、河童の三人、盗み見は感心しないわね?霊華は気づいてたみたいだけど」

「ひゅい!?!」

「あやややや……………ばれてましたか」

「だから言ったじゃないですか文さん……………」

「はあ、来るタイミングが良すぎるんじゃないかって?」

「いや、天魔様に今ここに来れば面白いのが見れると言われまして……………」

「あのカラス、外の世界まで見えるの?」

「たまたまトニーさんを『見聞』したらしく……」

「あ、あの……一応胡瓜の浅漬けとかおつまみ持って来たので……」

「……ふっ、まあいいわ。ギャラリーは多い方が面白いでしょうし」

「ありがとうございます……ってあやや？何時もいる従者の方は？」

「自分の式と一緒にちよつとした所用。お昼過ぎたしもう来るわ」

「紫、あの子汗流してから来るって……増えてる」

「おつまみお願い」

着席。

「『八雲は一切関わらない』、ただそれだけだ」

「……」

「あとそこに隠れている小娘、完全に気配を殺しているが故に不自然だぞ」

「！」

「初代には程遠いな。まあ精進しろ……………失礼する」

「橙、帰るぞ」

「あ、藍さま！じゃあ私帰るね、ばいばい！！」

「さっきのは？」

「ここのお嬢様みたいです、内気だけどいい子でしたよ！」

「暇だったのはわかるが……………あまり迂闊な行動は慎みなさい」

「う、うめんなさい……………」

「あ、いや、まあ少しだけ頭に残しておいてくれ。帰る前に食事で  
もしよう」

「わあ！ありがとうございます！！」

『……………発射されたミサイルは今現在、日本に向けて……………』

「ひ、人が薄い板の中にはいつてる！？」

「橙、これはテレビだ……………しかし電気屋か、掃除機でも買ってい

くかな？」

「藍さま、こつちにえっと……みさいる？が飛んできてるそうだけど大丈夫なんですか？」

「ん？……ああ、まあ問題ない。紫様もさほど気にしてなかったからな。それに……」

「それに？」

「……フフ。いや、こんな時に何故アイツの顔が浮かぶんだろくな？」

「うにゃあ………始まった、藍さまのお惚け」

着席。

「……ええ、……うん、こつちは大丈夫。でも貴方も無理しないかね？……あら？そう、彼が……フフフ、その愛情をあの子にも分けてくれないかしら？……臆病なヒト………わかった。じゃあまたね」

「おかあさん……」

「あら、どつしたの？」

「うん、おじさんがくれたおもちゃがこわれちゃって……………」

「あらあら、それならおもちゃのお医者さんのお母さんに任せなさい」

「うん！」

『……………日本政府は一部地域に避難勧告を出し……………』

「……………この子のお兄ちゃんはどんな人なのか楽しみね」

「？」

「何でも無いわ。さ、おもちゃを見せて頂戴『シャル』」

着席。

《ミッシヨンの内容を説明します。目的は日本に接近中のミサイルの撃墜です。破片は地上で待機しているウチコマが回収しますが、なるべく海上で破壊してください。破壊したミサイルの種類によって報酬が加算されます。》

「報酬つて、んなもん無えだろ？」

《気分的なものです。

父様の予想が正しければイレギュラーが出現する可能性があります、  
不用意な戦闘は避けて下さい。

ミッションの説明は以上です。スターク・インダストリーズは貴方  
を高く評価しています、ご健闘を。》

「アーマードでコアな説明お疲れさん。タチコマ、並列化」

「了解」

- Tachikoma arrange suit in par  
allel -

- Reactor condition all green -

- Output's adjusted by Tachikom  
a -

- Access to nerve complete -

- Pilot health is better -

- IRON MAN SERIES No. 21 「Dorago

n boot -

「準備完了、さあーて引つ掻き回しますかね!!」

着席、着席、着席。

観客は揃った。

滑稽なる三文芝居。

舞台上で舞うは白き騎士。

作家の兎は己に酔う。

観客はただその様を見つめるのみ。

しかし、舞台上に突然鉄仮面の男が現れた。

即興の喜劇が今始まる。

## 第九話 〈喜劇のはじまり〉（後書き）

〈補足〉

・ A I スペック表

ハッキング

笑い男 >>> 束 ≡ ジャーヴィス    タチコマ

戦闘支援

ジャーヴィス    タチコマ    束 > 笑い男

個性

タチコマ ≡ ジャーヴィス > 笑い男

個性は時間の問題。ハッキングは原作の笑い男のスペックから考慮、まあ目を盗める程だし。

戦闘支援はタチコマが現場、ジャーヴィスが指揮。いわゆる踊る大捜査線の青島と室井さん。

束さんは天才（天災）だけれども A I それぞれが一点突破なためどっこいどっこい。

・ 霊華スペック

勘がヤバい、強さがヤバい、胸がヤバいと色々ヤバい人。トニーがフラグ立てるかも？ どうなんですかねえ？（チラッチラッ

・ 藍さんの訪問先

更識な方々のところ。八雲のネームバリューは裏ではそこそこ有名、妖怪では無く権力で。すごいよボーダー商事！

・バレバレな伏線

シャルロットの方、お許し下さい！（ボルガ博士的な意味で）  
ハワード茶髪やし別にええやん？と思って書いた。

・やたら多いスーツ

宇宙用海中用惑星用と能力使って沢山作ってます。ISの技術流  
用はまだ無し、独自でバリアシールド、PICに近いものを開発し  
ています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9550v/>

---

アイアンな俺の日常

2011年10月1日15時11分発行